

男女共同参画社会をめざした市民意識調査
報 告 書

平成 23 年 8 月

尼 崎 市

目 次

・ 調査の概要	1
1. 調査目的	1
2. 調査方法	1
3. 調査項目	1
4. 調査内容	2
5. 回収結果	2
・ 調査結果の考察	3
・ 調査結果	6
回答者の属性	6
1. 男女の人権の尊重と女性に対する暴力の根絶	13
(1) ドメスティック・バイオレンス(DV)の被害経験と対応	13
(2) ドメスティック・バイオレンス(DV)に関する 相談機関の認知度	17
(3) ドメスティック・バイオレンス(DV)防止のために 必要なこと	18
(4) 市報等における性別が固定化されない表現配慮	19
2. 社会の制度・慣行等の見直し	20
(1) 男女の平等感	20
(2) 「男は仕事、女は家事・育児」への同意	23
(3) 男女共同参画に関する言葉の認知度	25
(4) 今後必要なこと	28
(5) 結婚の考え方	31
3. 政策・方針の企画決定における女性の参画拡大	32
(1) 女性が増えるとよい職業・役職	32
(2) 地域活動における男女の役割分担	33
4. ワーク・ライフ・バランスの確立	34
(1) 子育ての考え方	34
(2) 子どもに受けさせたい教育程度	36
(3) 高齢者になった時の身の回りの世話の希望	37
(4) 家庭での役割分担	38
(5) 仕事と家庭の関わり方	42
(6) 育児・介護休業の取得方法	45
(7) 仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先度	48
(8) 地域活動・グループ活動	49
(9) 男性の参加のために必要なこと	52
・ 自由意見	53
(1) 記入状況	53
(2) 代表的な意見	54
資料編	57
・ 集計表	57
・ 調査票	123

．調査の概要

1．調査目的

尼崎市における男女共同参画に関する意識の変化等を把握し、「第2次尼崎市男女共同参画計画」の策定及び今後の施策展開の基礎資料とすることを目的とする。

2．調査方法

調査対象：市内に居住する20歳以上の男女
 標本数：3,000人（男女各1,500人） 性年代別に無作為抽出
 調査手法：郵送配布、郵送回収（お礼状兼督促状1回配布）
 調査時期：平成23年5月

3．調査項目

「尼崎市男女共同参画計画」の施策体系をもとに調査項目を設定した。

基本目標	方針	質問内容	問番号
1 男女の人権の尊重と女性に対する暴力の根絶	女性に対するあらゆる暴力の根絶と自立支援	DVの被害経験と対応	問18
		DVに関する相談機関の認知度	問19
		DV防止のために必要なこと	問20
	メディアにおける女性の人権尊重	市報等における性別が固定化されない表現配慮	問16
2 社会の制度・慣行等の見直し	社会における男女共同参画の推進	男女の平等感	問1
		「男は仕事、女は家事・育児」への同意	問5
		男女共同参画に関する言葉の認知度	問13
		今後必要なこと	問14
		結婚の考え方	問17
3 政策・方針の企画決定における女性の参画拡大	政策形成への女性の参画の促進	女性が増えるとよい職業・役職	問15
		地域活動における男女の役割分担	問10
4 ワーク・ライフ・バランスの確立	家庭と仕事の両立支援	子育ての考え方	問2
		子どもに受けさせたい教育程度	問3
		高齢者になった時の身の回りの世話の希望	問4
		家庭での役割分担	問6
		仕事と家庭の関わり方	問7
		育児・介護休業の取得方法	問8
		仕事、家庭生活、地域・個人の生活優先度	問11
		まちづくりへの男女共同参画の促進	地域活動・グループ活動
	男性の参加のために必要なこと	問12	

4 . 調查內容

調查票參照

5 . 回收結果

有効回収數：1,123 票（女性 684 票、男性 416 票、性別不明 23 票）

回收率：37.4%（女性 45.6%、男性 27.7%）

年齡別回收數

年齡	女	男	不明	計
20~29 歲	72	29	0	101
30~39 歲	118	61	0	179
40~49 歲	103	67	0	170
50~59 歲	101	67	0	168
60~69 歲	164	104	1	269
70 歲以上	126	88	4	218
不明	0	0	18	18
計	684	416	23	1,123

年齡別回收率

年齡	女	男	不明	計
20~29 歲	37.3%	14.1%		25.3%
30~39 歲	44.5%	20.7%		32.0%
40~49 歲	43.3%	25.2%		33.7%
50~59 歲	51.3%	31.2%		40.8%
60~69 歲	61.0%	38.2%		49.7%
70 歲以上	37.3%	35.8%		37.3%
不明				
計	45.6%	27.7%		37.4%

< 參考：年齡別抽出數 >

年齡	女	男	計
20~29 歲	193	206	399
30~39 歲	265	295	560
40~49 歲	238	266	504
50~59 歲	197	215	412
60~69 歲	269	272	541
70 歲以上	338	246	584
計	1,500	1,500	3,000

・ 調査結果の考察

< 回答者の属性 >

回答者の性別割合は、女性が 60.9%、男性が 37.0%である。

男女の合計の集計結果には、女性の意見がより強く反映されている可能性がある。[p.6 参照]

女性の仕事では、20 歳代で「常勤（フルタイム）」、30 歳代で「常勤（フルタイム）」、「家事専従」、40 歳代及び 50 歳代で「パート・アルバイト」が最も多い。[p.8 参照]

また一番下の子どもの年代別にみると、「就学前」「学校を終えた」子どもをもつ女性では「家事専従」が、「小学生」「中学生・高校生」では「パート・アルバイト」が、「専修学校、短大、大学、大学院などの学生」では「常勤（フルタイム）」が最も多くなっており、子どもの成長過程が女性の職業形態に影響を与えていることがうかがえる。[p.9 参照]

働いている理由は、男女ともに「生活費を得るため（自分の収入が無いと生活できない）」が最も多いが、男性の方が女性よりも約 3 割高くなっている。また、「働くことは当然である」も男性が女性より、約 3 割高くなっている。男性の方が女性より家計を支える中心という認識が高い。[p.10 参照]

< 基本目標にかかる概要 >

基本目標 1. 男女の人権の尊重と女性に対する暴力の根絶

ドメスティックバイオレンス（DV）について、「身体に対する暴行」「脅迫」「暴言や無視」「性的行為の強要」「経済的な暴力」「社会的な暴力」いずれの暴力の種類でも、女性の方が男性よりも被害経験が高い。「身体に対する暴行」「暴言や無視」では、約 1 割女性の方が男性より受けた割合が高い。[p.14 参照]

何らかのDVを受けたことのある人の対応は、「どこ（だれ）にも相談しなかった」が女性約 5 割、男性で約 6 割であり、自分で問題を抱え込んでいる状況がうかがえる。[p.16 参照]

DV被害を相談しなかった理由は、「相談するほどのことではないと思ったから」が最も多く、また、「相談しても無駄だと思ったから」、「自分にも悪いところがあると思ったから」、「自分さえがまんすればやっていけると思ったから」なども多い。[p.16 参照]

DVの相談機関の認知度は、「警察」次いで「弁護士・弁護士会・日本司法支援センター（法テラス）」が高いが、DVを専門的に扱う相談機関の認知度は高いとは言えない。DV被害を相談していない状況も考えると、心理的ハードルが低い相談機関の認知度を高める必要がある。[p.17 参照]

DV防止のため必要なことは、「家庭で子どもに対し、暴力をふるわないことや人権・男女平等に関する教育を行う」、「学校で、暴力をふるわないことや人権・男女平等に関する教育を行う」が高くなっており、教育の充実が求められている。[p.18 参照]

基本目標 2. 社会制度・慣行等の見直し

8 項目の分野での男女の平等感、不平等感が全体で最も高い分野が「職場（賃金・昇進）」で、「あまり平等でない」と「平等でない」を合わせて 6 割をこえている。ただし、前回と

比べると、約 8 ポイント不平等感は減少した。[p.21 参照]

性別にみると、「家庭生活」「法律や制度」「政治・経済の分野」では女性の方が不平等感が高い傾向がある。特に「家庭生活」の不平等感は、女性が男性より 20 ポイント高い。[p.22 参照]

「男は仕事、女は家事・育児」への同意については、全体では「同意」が 51.2%、「不同意」が 47.6%で同意が若干高い。[p.23 参照]

性別では、「同意」が、男性の方が女性よりも約 12 ポイント高い。

性別年代別では、女性では、70 歳代以上でのみ「同意」が「不同意」よりも高いのに対し、男性ではほとんどの年代で「同意」が「不同意」よりも高い。

前回と比較すると、「同意」の割合は女性で約 9 ポイント減ったが、全体では、依然「同意」が半数を超えており、性別役割分担意識が根強い。国と設問の文言は異なるが、比較すると本市の方が「同意」の割合が高い。[p.24 参照]

「性同一性障害」「ドメスティックバイオレンス(DV)」の意味や内容を知っている人は約 7 割である。一方で「尼崎男女共同参画申出処理制度」、「尼崎市男女共同参画推進事業者表彰」、「尼崎市男女共同参画推進員」などの認知度は低く、市民への情報提供が必要である。[p.25 参照]

男女共同参画社会に向けて今後必要とされることは、「子育て、介護を支援するサービスを充実させる」が最も多く、次いで「女性が経済力や知識・技術を身につける」、「職場で育児休業・介護休業の取得を促進する」である。子育てや介護に関することが多い中、「女性が経済力や知識・技術を身につける」は前回より約 6 ポイント増加した。[p.28 参照]

「結婚は個人の自由であるから、必ずしも結婚しなくてもよい」について、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて約 7 割(女性 7 割、男性 6 割)であり、「結婚してもうまくいかなければ、離婚してやり直す方がよい」について、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて約 74.9%(女性 8 割、男性 7 割)であり、どちらも同意の割合が高い。後者については、前回より同意の割合が 8 ポイント高くなった。[p.31 参照]

基本目標 3. 政策・方針の企画決定における女性の参画拡大

女性が増えるといふ職業は、「国会議員、都道府県議会議員、市(区)町村議会議員」が 45.4%で最も多く、次いで「都道府県、市(区)町村の首長」が 43.6%、「裁判官、検察官、弁護士」が 41.4%などとなっている。[p.32 参照]

単位福祉協会(自治会)、ボランティアなどの地域活動における男女の役割分担は、現実には「団体の長には男性が就く」において「そうである」の割合が高く、一方で、「男性の参加が少ない」においても「そうである」の割合が高い。現実に対して、「改善すべき」との意識はすべての項目で 40%前後みられる。[p.33 参照]

基本目標 4. ワーク・ライフ・バランスの確立

「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるのがよい」への同意は、全体で 7 割である。男性の方が女性より、同意の割合は 1 割程度高い。「男女区別せず、個人の能力や性格に応じて、その子らしく育てるのがよい」への同意は男女ともに 9 割である。

いずれの設問にも同意していることがうかがえ、2つの考え方が相反しないものと捉えられている。[p.34 参照]

女の子に受けさせたい(受けさせなかった)教育程度は、「四年制大学」が44.9%、「短大・高専」が20.3%であるのに対し、男の子に受けさせたい(受けさせなかった)は、「四年制大学」が63.2%となっており、男女で異なる方針であることがうかがえる。[p.36 参照]

寝たきりや認知症になった時の身の回りの世話の希望は、「社会福祉施設やケア住宅に入所」が6割、「配偶者」が5割、「ホームヘルパーやボランティア」が4割となっている。男性が女性より「配偶者」を希望する割合が高い。前回と比較すると、「配偶者」、「娘」を希望する割合は1割程度減っており、身内の者による介護への期待が減っていると考えられる。[p.37 参照]

家庭の仕事11項目の役割分担について、「理想」は7項目で「夫婦共同」が多く、「現実」は8項目で「主に妻」が多い。理想では夫婦共同であっても、現実には主に妻が行っており、理想と現実のギャップが大きい。[p.38 参照]

女性の好ましい仕事と家庭の関わり方は「どちらかといえば家庭を優先する」が、53.2%で最も多い。一方、男性の関わり方では「どちらかといえば仕事を優先する」が、45.2%で最も多く、性別による違いが大きい。[p.42 参照]

性別年代別にみると、女性の関わり方は、女性は50歳代で、男性は30歳代で「仕事と家庭と同程度かかわる」が他よりも高く、男性の関わり方は「仕事を優先する」割合が男女共に60歳代で最も高い。[p.43 参照]

育児休業の取得については、「どちらかといえば妻が取るほうがよい」が39.4%、「夫も妻も同程度に取るのがよい」が、34.7%である。

介護休業の取得については、「夫も妻も同程度に取るのがよい」が69.5%で最も多い。

現実には、育児休業も介護休業も、夫婦「どちらも取得できない/できなかった」が3割で最も多くなっており、実際に休業を取得するためには、課題が多いと考えられる。前回と比較して、男性で育児休業・介護休業ともに、夫婦「どちらも取得できない/できなかった」の割合が1割程度増加した。[p.45 参照]

「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度は、希望では『「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい』が、現実には家庭生活か仕事のどちらかを優先しており、女性が家庭、男性が仕事の傾向がある。『「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先している』は希望では高いが現実にはほとんど優先できていない。[p.48 参照]

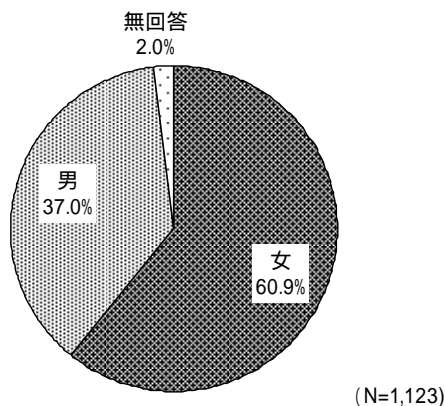
現在、地域活動やグループ活動をしていない人は、女性で5割、男性で6割である。今後新たにしてみたい活動は「活動するつもりはない」が最も多いが、「教養や趣味の活動」の活動意欲も見られる。[p.49 参照]

今後、男性が女性とともに家事、子育て、介護、地域活動に積極的に参加していくために必要なことは、「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかる」「男性の家事・地域活動などへの参加に対する男性自身の抵抗感をなくす」「労働時間短縮や休暇制度の普及により、仕事以外の時間を多く持てるようにする」などが上位にあがっており、本人や家族内、また職場での理解が必要であると考えられている。[p.52 参照]

．調査結果

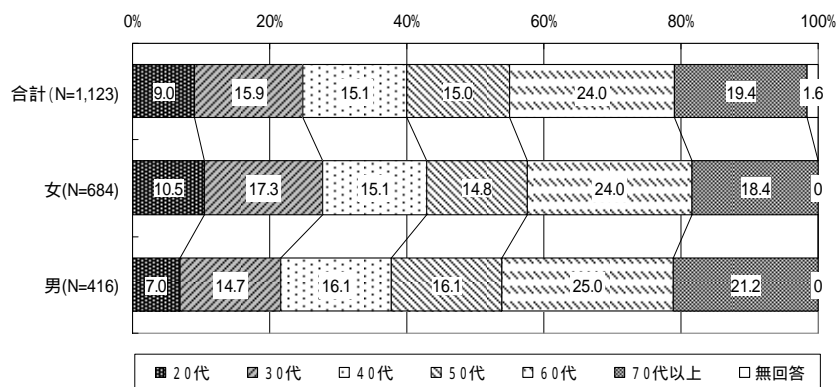
< 回答者の属性 >

ア．性別



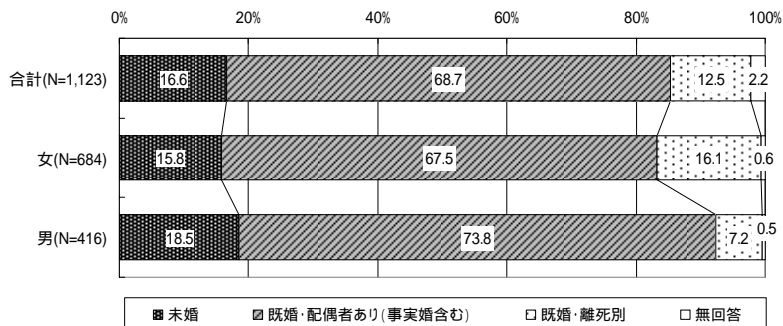
回答者の性別は女性が 60.9%、男性が 37.0%である。

イ．年代



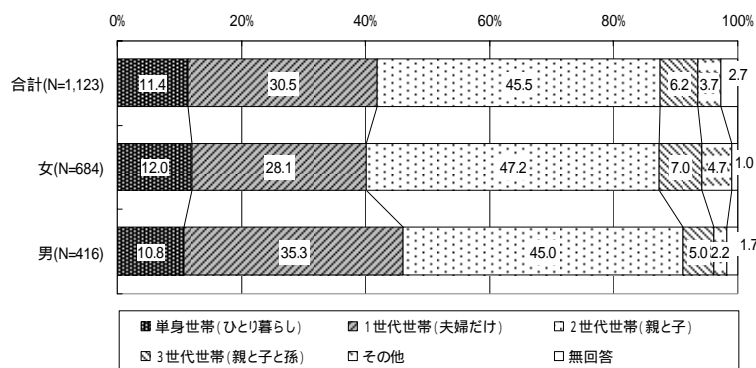
回答者の年代は全体で見ると 60 歳代が 24.0%で最も多く、次いで 70 歳代以上が 19.4%、30 歳代が 15.9%などとなっている。

ウ．結婚の有無



結婚の有無は、全体では「既婚・配偶者あり（事実婚を含む）」が 68.7%で最も多い。性別にみると「既婚・配偶者あり（事実婚を含む）」は男性の方が女性よりも約 6 ポイント高い。「既婚・離死別」は女性の方が男性よりも約 9 ポイント高い。

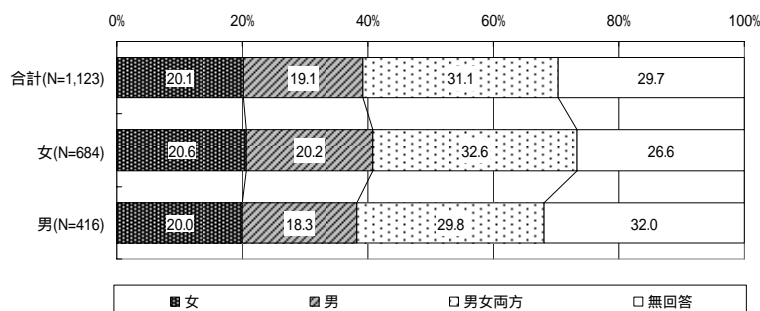
エ．家族構成



家族構成は、全体では「2世代世帯(親と子)」が45.5%で最も多い。性別にみると、「1世代世帯(夫婦だけ)」は男性が女性よりも約7ポイント高い。

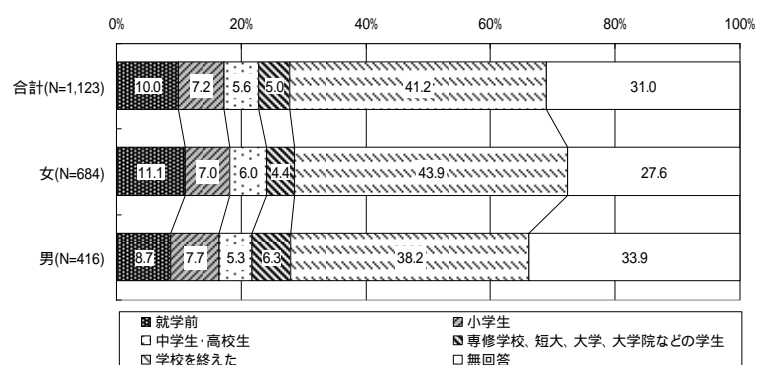
オ．子ども

(1) 子どもの性別



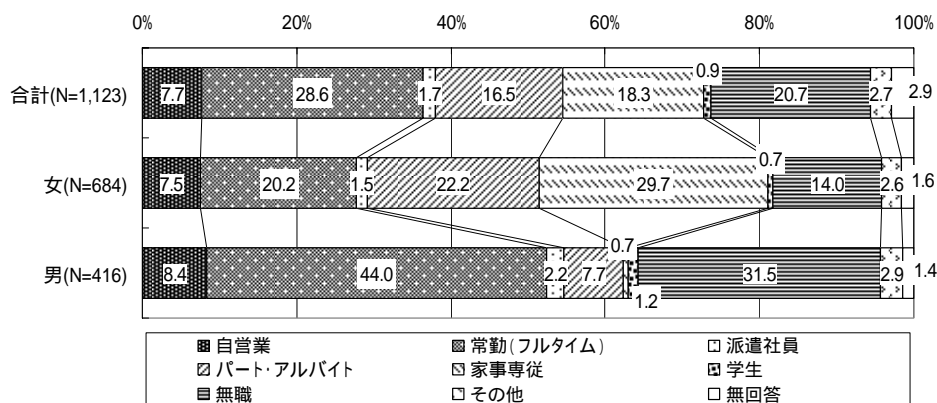
子どもの性別は、全体では男女両方が31.1%で最も多い。

(2) 一番下の子どもの年代



一番下の子どもの年代は「学校を終えた」が41.2%で最も多い。

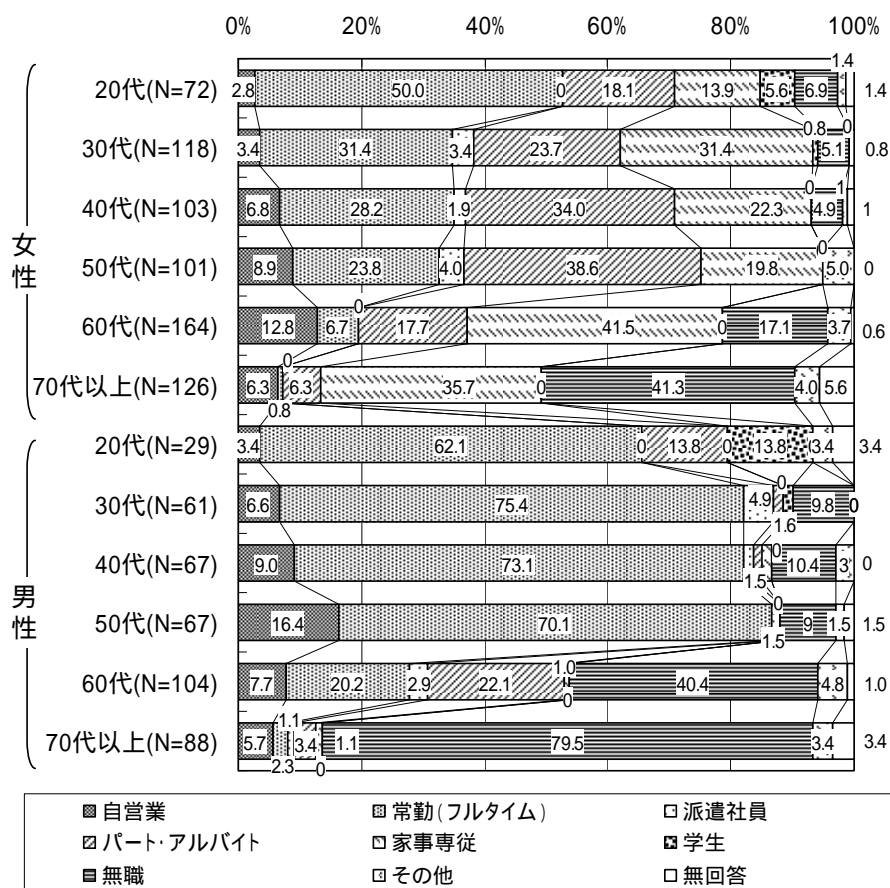
カ．回答者の仕事



回答者の仕事は、全体では、「常勤（フルタイム）」が28.6%で最も多い。「自営業」、「常勤（フルタイム）」、「派遣社員」、「パート、アルバイト」を合わせた職業を持っている人の割合は54.5%である。

性別にみると、職業をもっている人は女性で51.4%、男性で62.3%である。女性は「家事専従」が29.7%で最も多く、男性は「常勤（フルタイム）」が44.0%で最も多い。

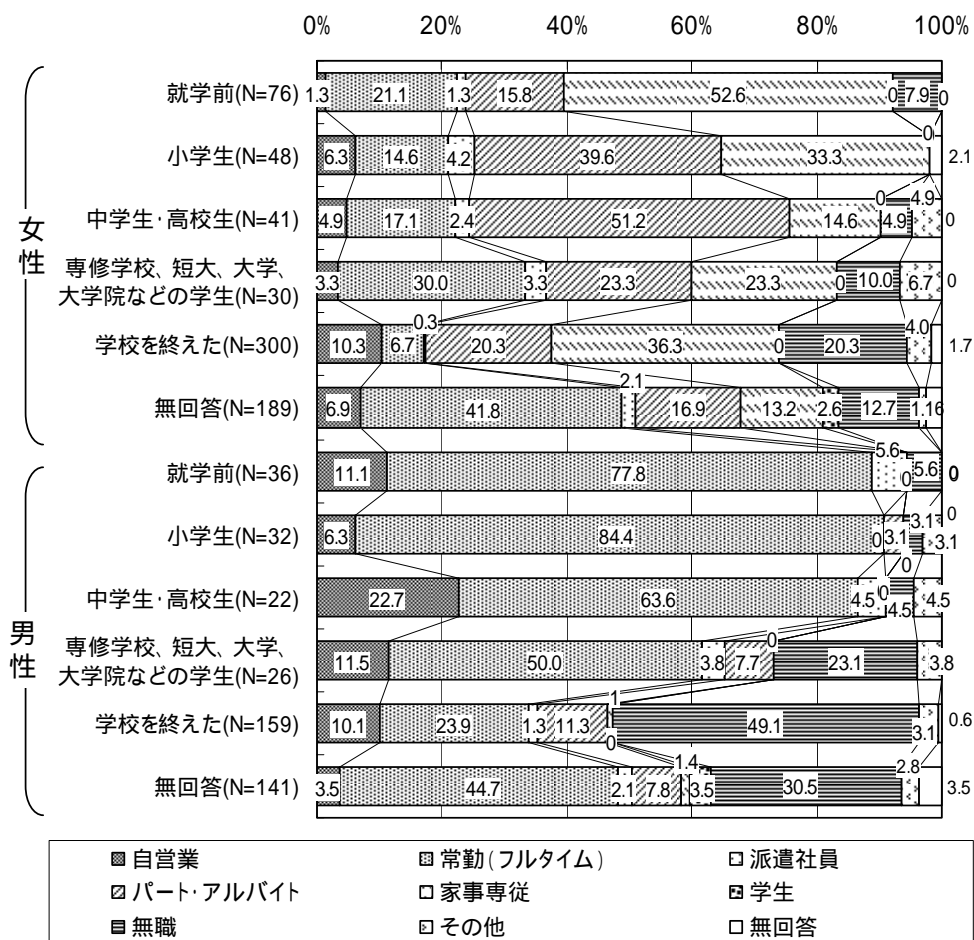
< 性別年代別 >



性別、年代別にみると、女性に最も多いのは、20歳代で「常勤（フルタイム）」（50.0%）30歳代で「常勤（フルタイム）」、「家事専従」（31.4%）、40歳代で「パート・アルバイト」（34.0%）、50歳代も「パート・アルバイト」（38.6%）、60歳代は「家事専従」（41.5%）、70歳以上で「無職」（41.3%）である。

男性は、20歳代から50歳代まで「常勤（フルタイム）」が最も多く、60歳代及び70歳代以上では「無職」が最も多い。

<一番下の子どもの年代別>

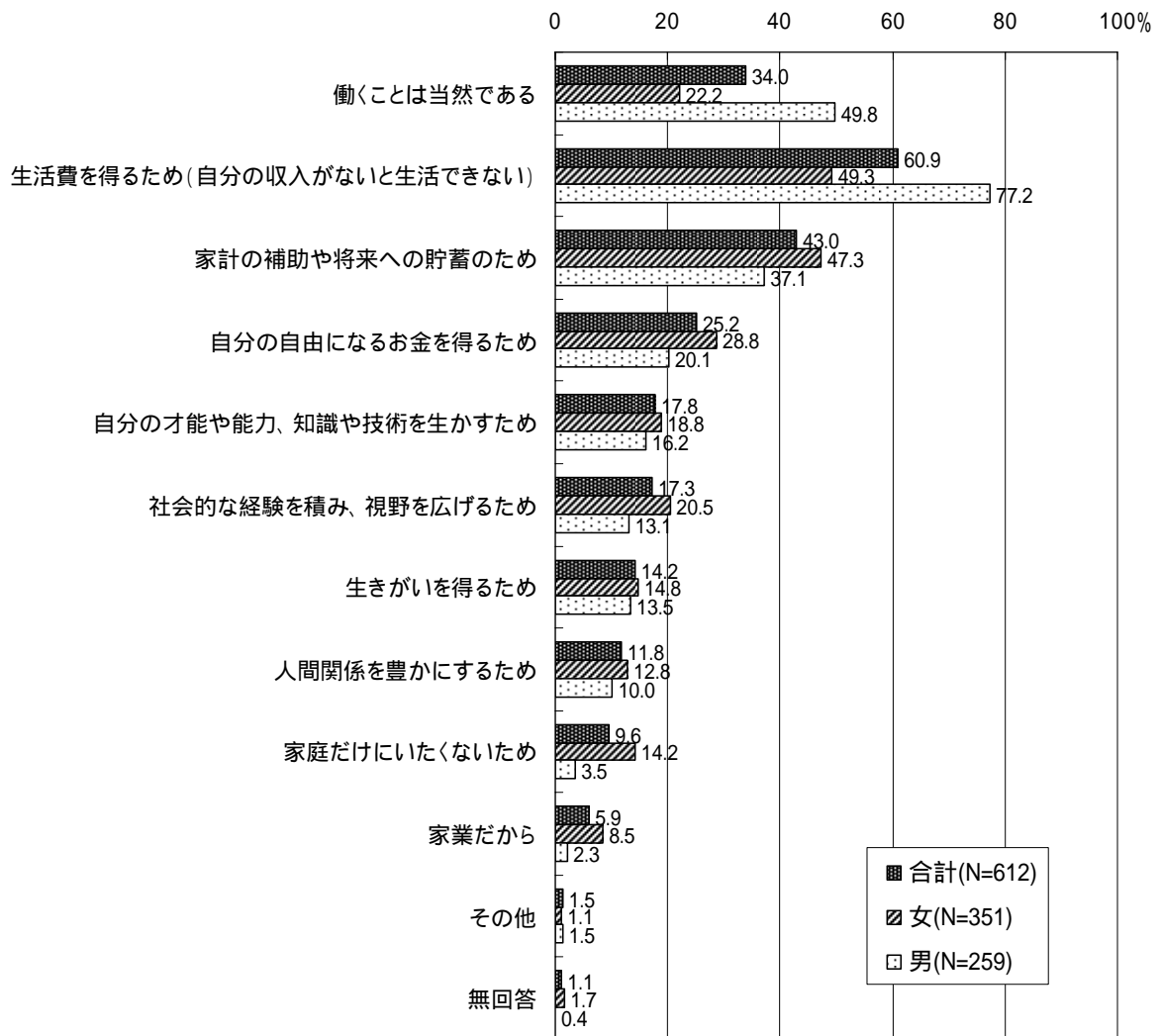


一番下の子どもの年代別に見ると、「就学前」「学校を終えた」子どもをもつ女性では、「家事専従」が最も多く、「小学生」「中学・高校生」では、「パート・アルバイト」が最も多く、「専修学校、短大、大学、大学院などの学生」では「常勤(フルタイム)」が最も多い。

男性では「就学前」から「専修学校、短大、大学、大学院などの学生」を通して、「常勤(フルタイム)」が最も多い。

(1) 働いている理由

(カ.で「自営業」、「常勤(フルタイム)」、「派遣社員」、「パート・アルバイト」と回答した方。)

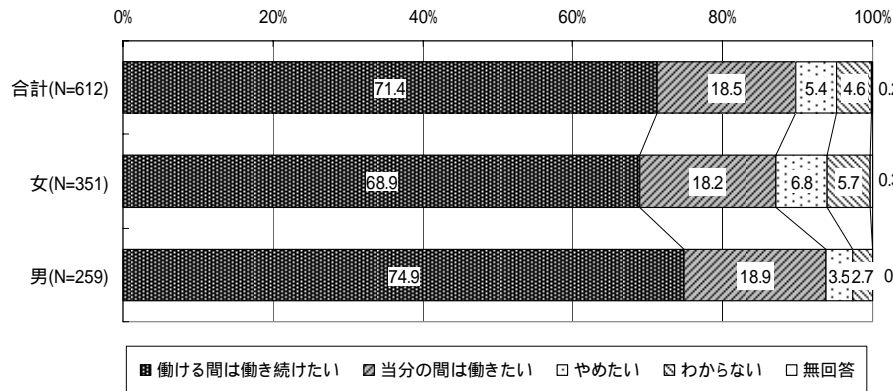


全体では「生活費を得るため(自分の収入がないと生活できない)」が60.9%で最も多い。
性別にみると、男女ともに「生活費を得るため(自分の収入がないと生活できない)」が最も多く、男性が77.2%、女性が49.3%で約28ポイント男性の方が高い。

「家計の補助や将来への貯蓄のため」や「家庭だけにいたくないため」などは女性の方が男性よりも10ポイント以上高い。

(2) 今後も仕事を持ち続けたいか

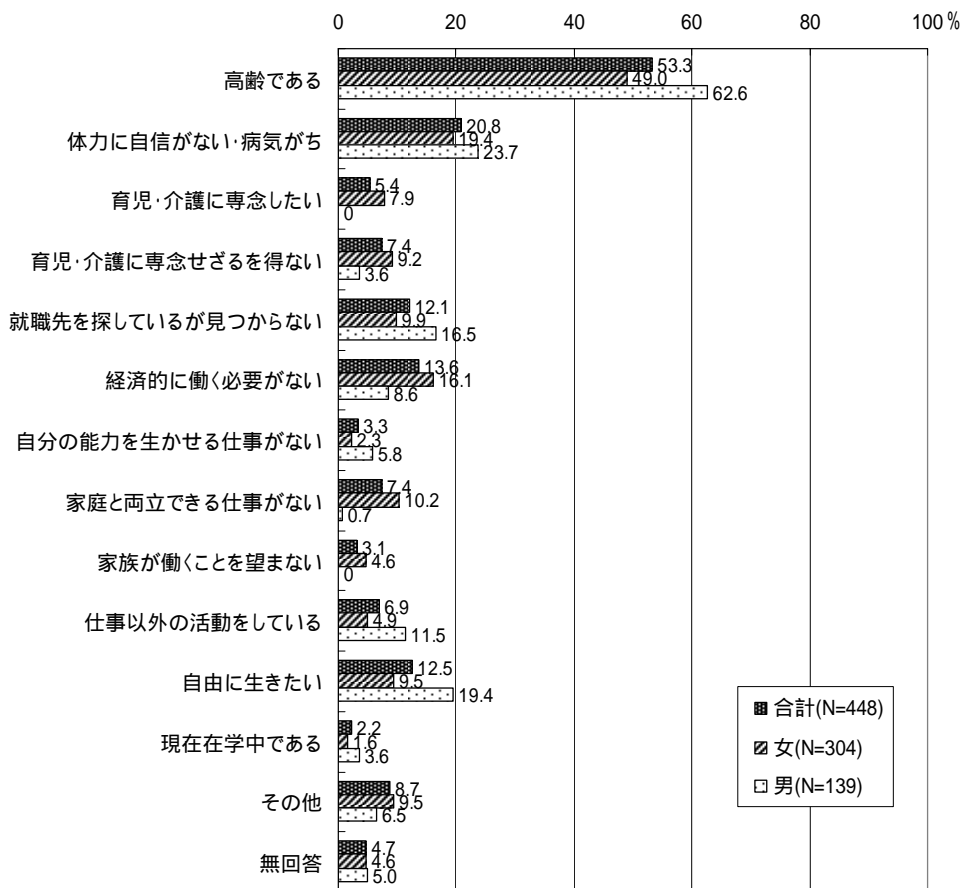
(カ.で「自営業」、「常勤(フルタイム)」、「派遣社員」、「パート・アルバイト」と回答した方。)



「働ける間は働き続けたい」と「当分の間は働きたい」を合わせた働き続ける意志のある方は、女性では87.1%、男性では93.8%で、男性の方が約7ポイント高い。

(3) 働いていない理由

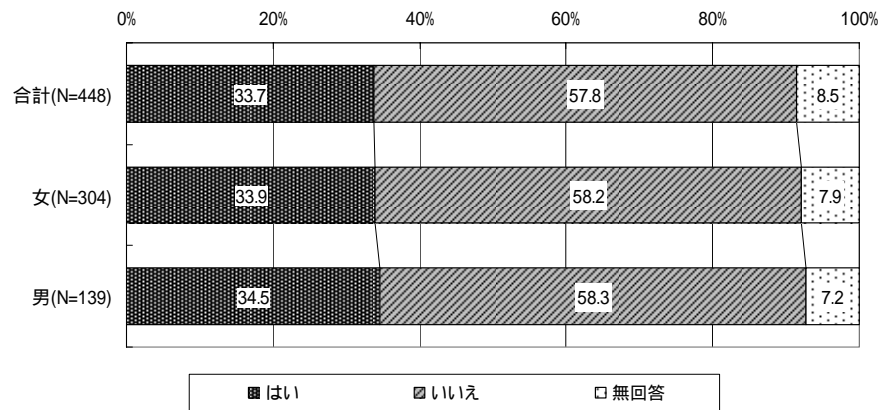
(カ.で「家事専従」、「学生」、「無職」と回答した方。)



全体では「高齢である」が53.3%で最も高い。性別にみると「高齢である」は男性が女性よりも約14ポイント高い。また「家庭と両立できる仕事がない」、「育児・介護に専念したい」、「経済的に働く必要がない」などは、女性の回答の割合が男性よりも約8~10ポイント高くなっている。

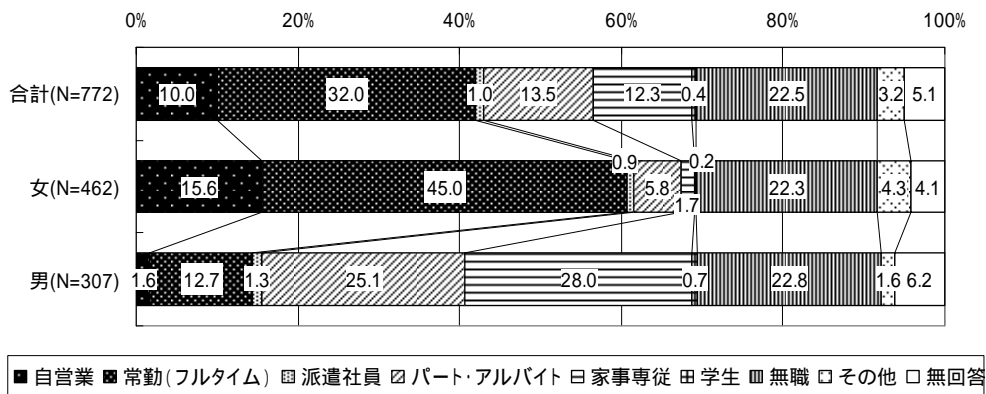
(4) 今後は仕事をもちたいか

(カ.で「家事専従」、「学生」、「無職」と回答した方。)



仕事をもちたい人(「はい」)は全体では33.7%である。性別にみると女性が33.9%、男性が34.5%である。

(5) 配偶者の仕事



配偶者の仕事は、全体では「常勤(フルタイム)」が32.0%で最も多く、次いで「無職」が22.5%、「パート・アルバイト」が13.5%などとなっている。性別にみると、女性では「常勤(フルタイム)」は45.0%で最も多く、次いで「自営業」が15.6%などとなっている。男性では家事専従が28.0%で最も多く、次いで「パート・アルバイト」が25.1%などとなっている。

1. 男女の人権の尊重と女性に対する暴力の根絶

(1) ドメスティックバイオレンス (DV) の被害経験と対応

問18 ドメスティック・バイオレンス (DV) 配偶者や恋人などからの暴力について、あなた自身の経験をうかがいます。それぞれの項目について、あてはまる選択肢の番号に1つをつけてください。婚姻届を出していない事実婚や別居中の夫婦、元配偶者や元恋人も含まれます。

<項目> 下記グラフでは項目を要約

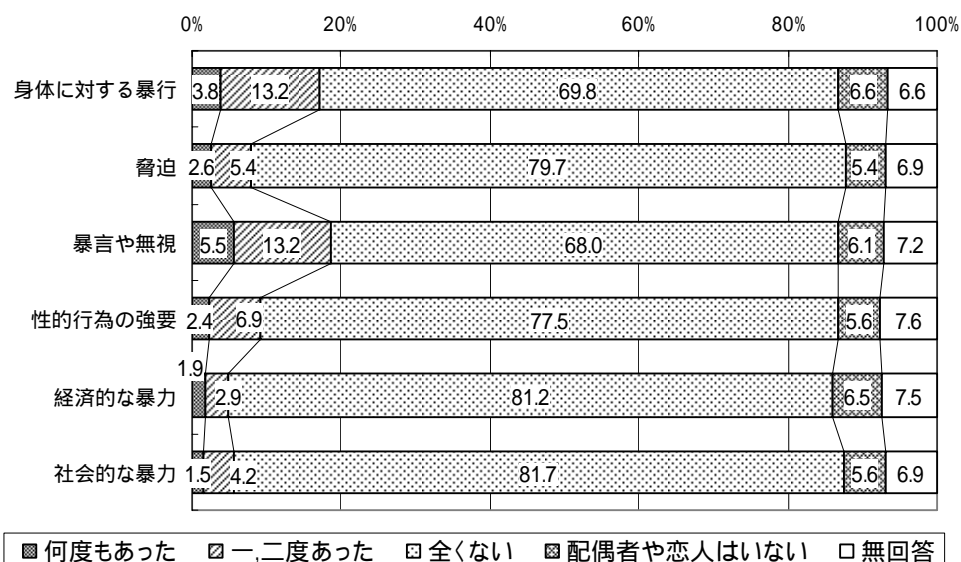
- なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行を受けた
- あなたもしくはあなたの家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫を受けた
- 人格を否定するような暴言や無視などの精神的ないやがらせを受けた
- いやがっているのに性的な行為を強要された
- 生活費を渡さない、妻が仕事に就くことを禁じるなどの経済的な暴力を受けた
- 交友関係を細かく禁止するなどの社会的な暴力を受けた

(付問1) 上の質問で「何度もあった」または「一、二度あった」と回答した方にうかがいます。配偶者や恋人などから受けた行為について、だれかに相談しましたか。あてはまる選択肢の番号にすべてをつけてください。

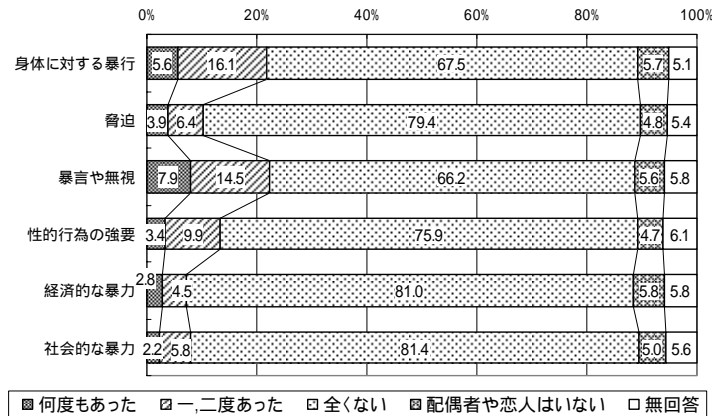
(付問2) 付問1で「どこ(だれ)にも相談しなかった」と回答した方にうかがいます。どこ(だれ)にも相談しなかったのは、なぜですか。あてはまる選択肢の番号にすべてをつけてください。

ア. DVを受けた経験の有無

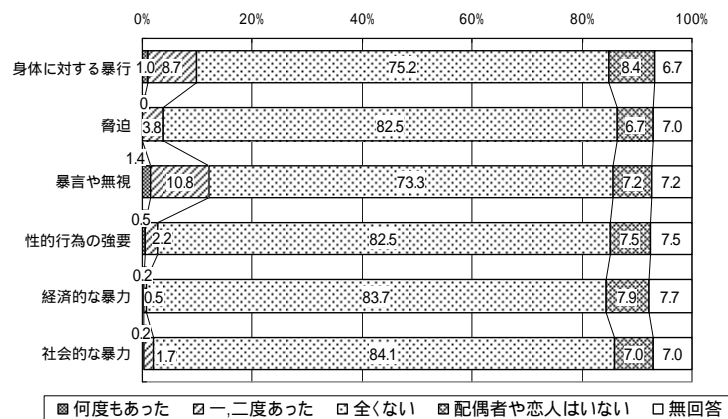
全体 (N=1,123)



女性 (N=684)

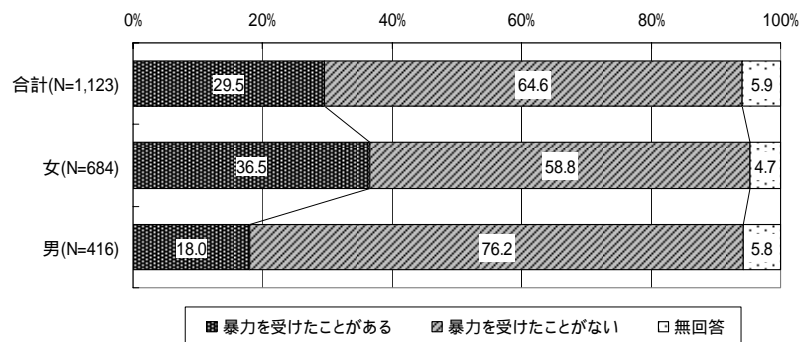


男性 (N=416)



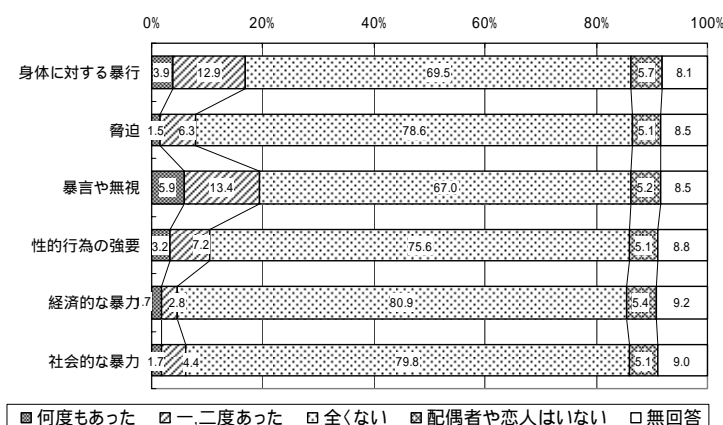
全体では「何度もあった」と「一、二度あった」を合わせた暴力を受けた割合は「暴言や無視」で18.7%と最も多く、次いで「身体に対する暴行」で17.0%などとなっている。性別にみると、いずれの項目でも、女性の方が男性よりも暴力を受けた割合は高い。「暴言や無視」では約10ポイント、「身体に対する暴行」では12ポイント、暴力を受けた割合が女性の方が男性よりも高い。

～ までの項目のうち1つでも「何どもあった」「一、二度あった」に を付けた方を「暴力を受けたことがある」に、それ以外を「暴力を受けたことがない」に再分類したところ以下のようになった。

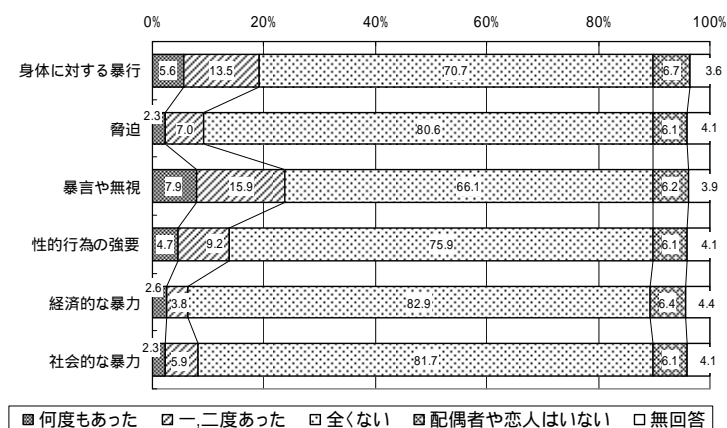


全体では「暴力を受けたことがある」は29.5%である。性別にみると、「暴力を受けたことがある」は女性で36.5%で男性よりも約19ポイント高くなっている。

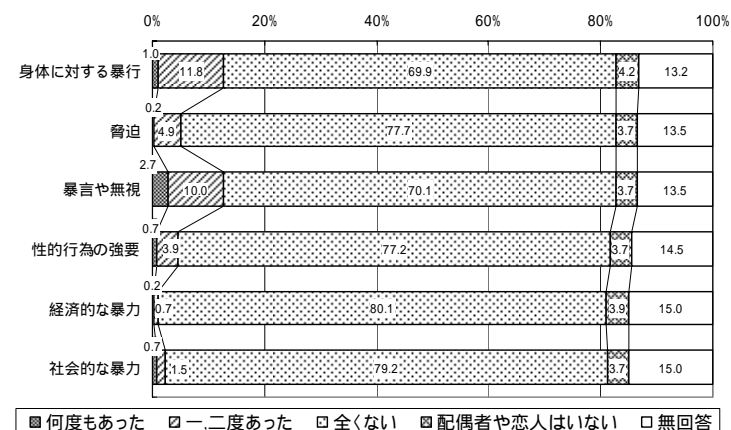
全体 (N=1,088)



女性 (N=661)



男性 (N=408)

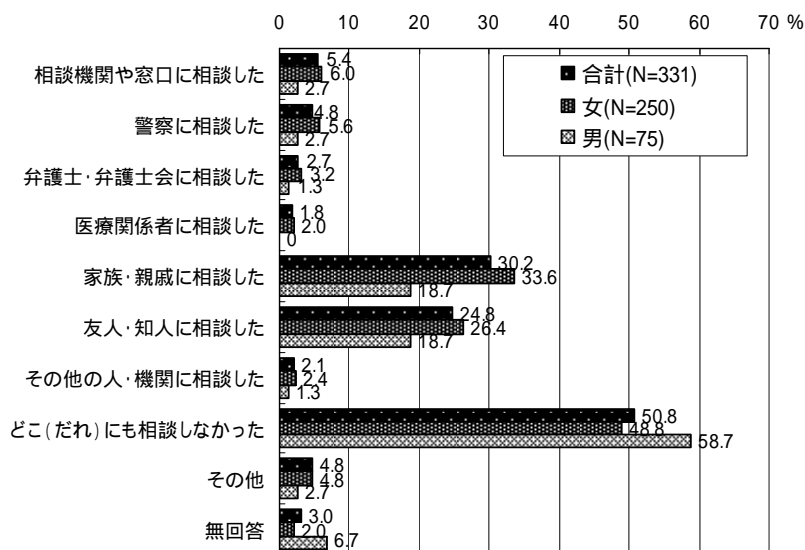


前回調査と比較すると、暴力を受けた割合、暴力の種類順位に大きな変化はない。

< 国との比較 >

内閣府「男女間における暴力に関する調査」(平成20年10~11月)と比較すると、「身体に対する暴行」の「何度もあった」と「一、二度あった」を合わせた暴力を受けた割合は、女性で24.9%、男性で13.6%となっており、女性で約3ポイント、男性が約4ポイント本市の方が少なくなっている。

イ. DVを受けたときに相談したことの有無



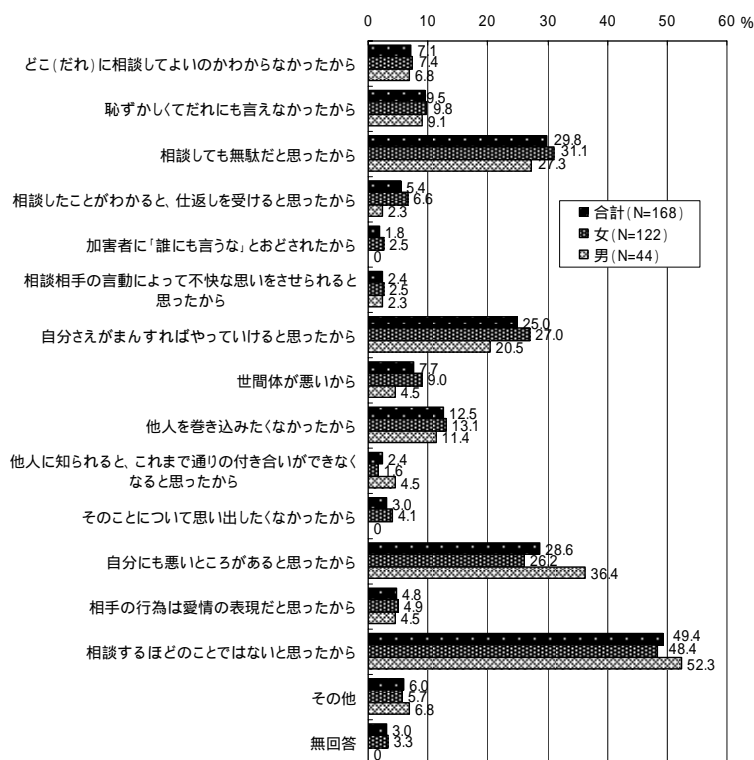
全体では「どこ(だれ)にも相談しなかった」が 50.8%で最も多い。次いで「家族・親戚に相談した」が 30.2%、「友人・知人に相談した」が 24.8%となっており、相談先は家族、親戚や友人・知人が多く、公的機関や専門職への相談は少ない。

性別にみると「どこ(だれ)にも相談しなかった」は、男性の方が女性よりも約 10 ポイント高い。「家族・親戚に相談した」は約 15 ポイント、「友人・知人に相談した」は約 8 ポイント女性の方が男性よりも高くなっている。

< 前回調査 >

前回調査と比較すると、今回同様、前回も「どこ(だれ)にも相談しなかった」が 54.9%で最も多い。

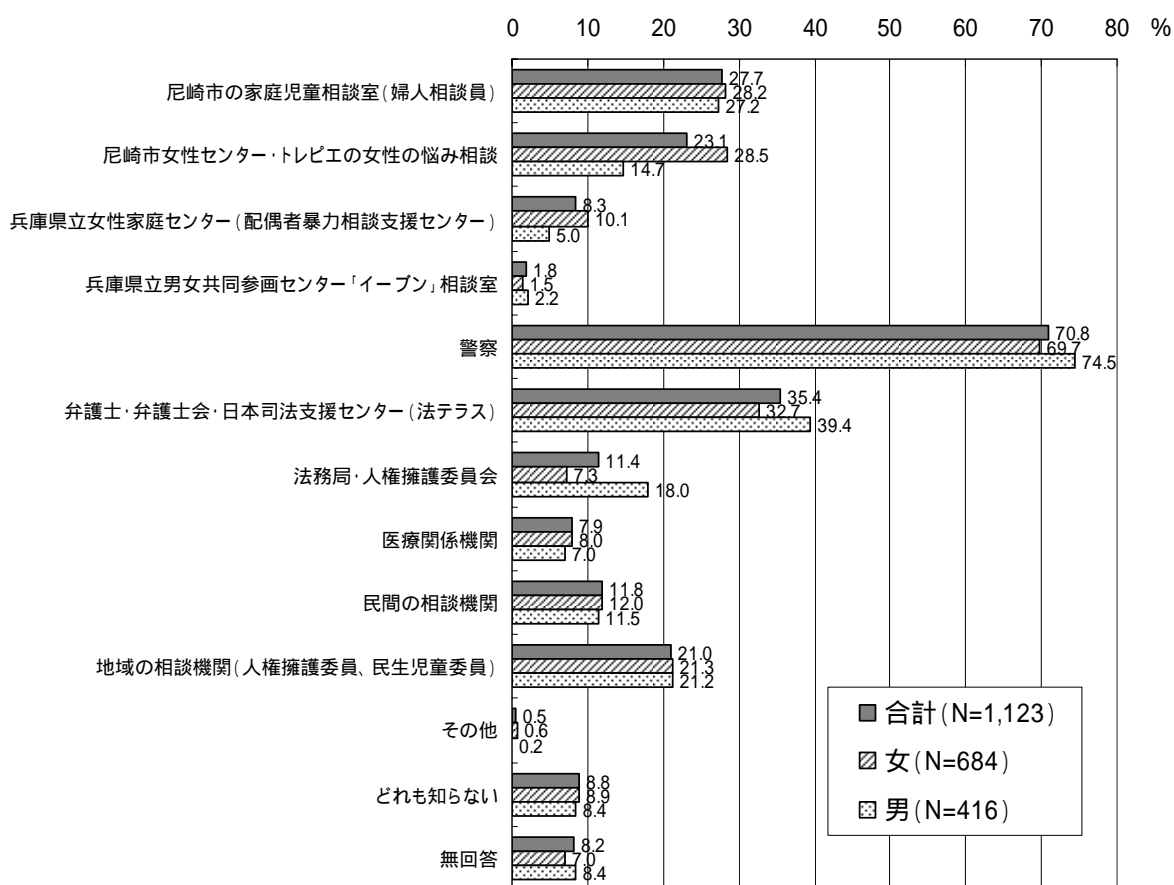
ウ. どこ(だれ)にも相談しなかった理由



全体では「相談することのほどこではないと思ったから」が49.4%で最も多く、次いで「相談しても無駄だと思ったから」が29.8%、「自分にも悪いところがあったから」が28.6%、「自分さえがまんすればやっていけると思ったから」が25.0%などとなっている。性別にみると「自分にも悪いところがあったから」は男性が女性より約10ポイント高くなっている。

(2) ドメスティック・バイオレンス(DV)に関する相談機関の認知度

問19 あなたやまわりの方が配偶者や恋人などからの暴力の被害にあわれたとき、どのような相談機関や窓口があるかご存知ですか。知っている機関や窓口の選択肢の番号にすべてをつけてください。



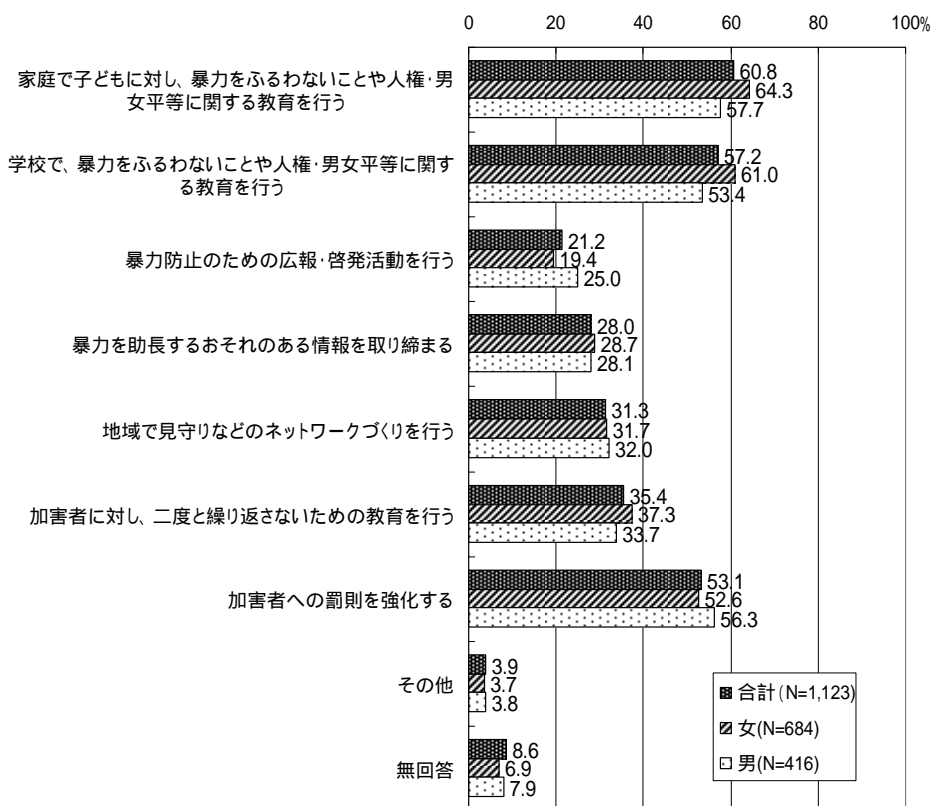
全体では「警察」が70.8%で最も多く、次いで「弁護士・弁護士会・日本司法支援センター(法テラス)」が35.4%、「尼崎市の家庭児童相談室(婦人相談員)」が27.7%などとなっている。性別にみると「尼崎市女性センター・トレピエの女性の悩み相談」では女性が男性より約14ポイント高い。

< 前回調査 >

前回と比較すると大きな変化はない。

(3) ドメスティック・バイオレンス(DV)防止のために必要なこと

問20 配偶者や恋人などからの暴力を防止するためには、どのようなことが必要だと思いますか。あてはまる選択肢の番号にすべてをつけてください。

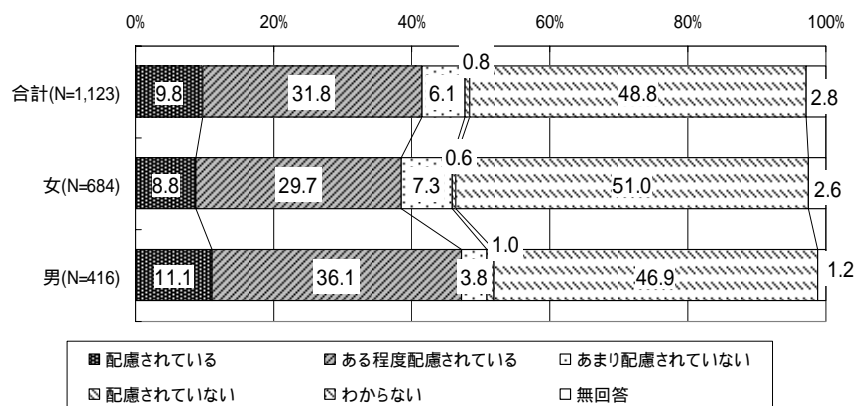


全体では「家庭で子どもに対し、暴力をふるわないことや人権・男女平等に関する教育を行う」が60.8%で最も多く、次いで「学校で、暴力をふるわないことや人権・男女平等に関する教育を行う」が57.2%、「加害者への罰則を強化する」が53.1%などとなっている。

性別にみると「家庭で子どもに対し、暴力をふるわないことや人権・男女平等に関する教育を行う」、「学校で、暴力をふるわないことや人権・男女平等に関する教育を行う」では、女性が男性よりも約7~8ポイント高い。

(4) 市報等における性別が固定化されない表現配慮

問16 尼崎市の市報や発行物、ホームページなどの内容は、全体的にみて、男女の役割が固定化されないよう配慮されていると思いますか。あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。



全体では「配慮されている」と「ある程度配慮されている」を合わせた配慮されていると感じる割合は41.6%で、「あまり配慮されていない」と「配慮されていない」を合わせた配慮されていないと感じる割合は6.9%である。

性別にみると、配慮されていると感じる割合は男性が女性よりも約9ポイント高い。

<前回調査>

前回調査と比較すると、全体では配慮されていると感じる割合は、前回45.8%であったのが今回41.6%になっており約4ポイント減少している。

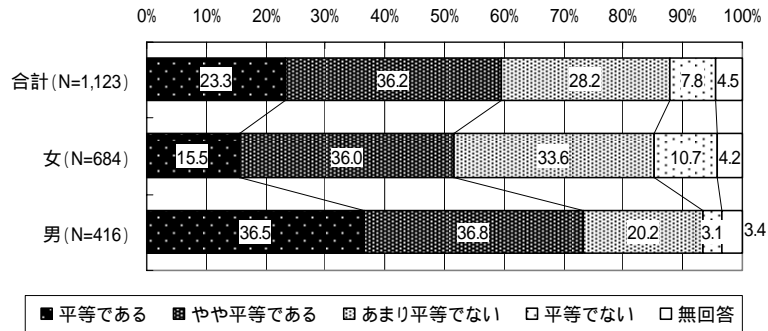
女性では配慮されていると感じる割合は、前回44.5%であったのが、今回38.5%になっており6ポイント減少している。

2. 社会の制度・慣行等の見直し

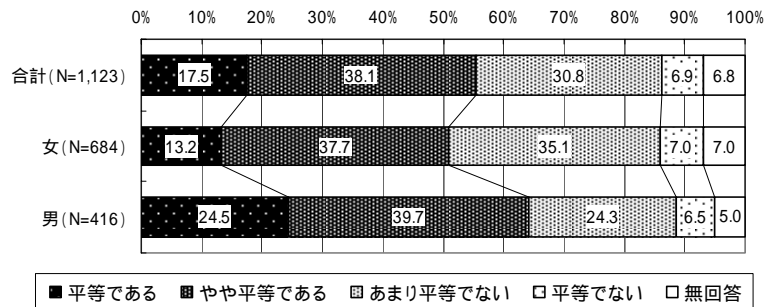
(1) 男女の平等感

問1 次の各分野において、男女はどの程度平等だと思いますか。それぞれの項目について、あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

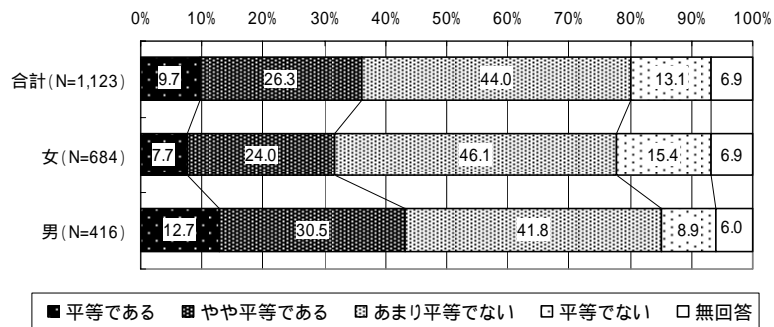
家庭生活



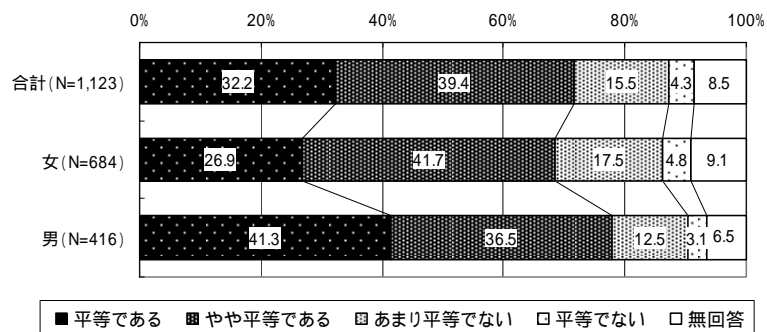
地域活動



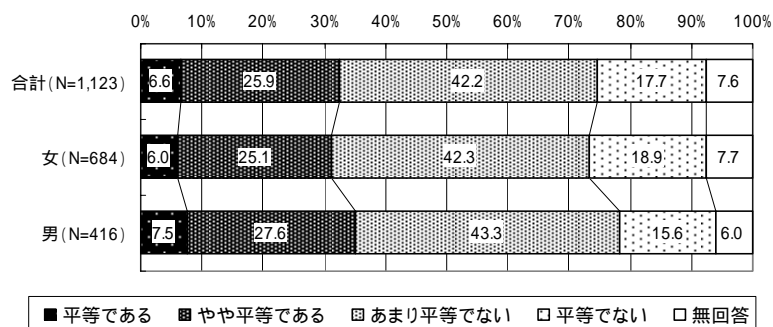
社会通念やしきたり



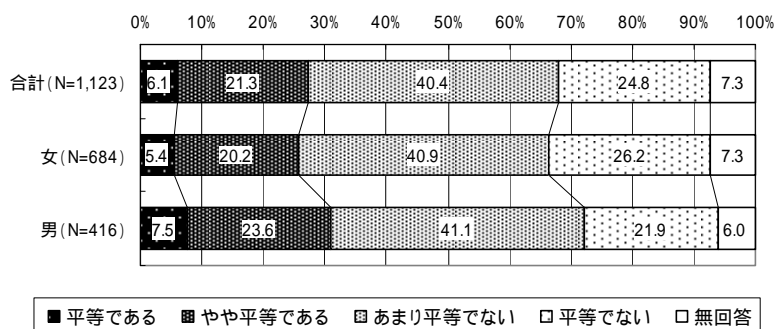
学校(教育の場)



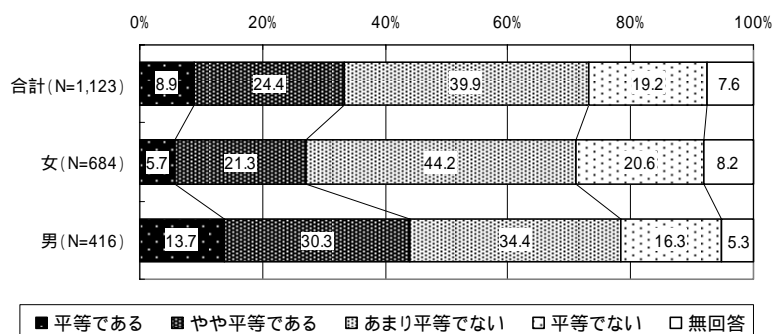
就職・雇用



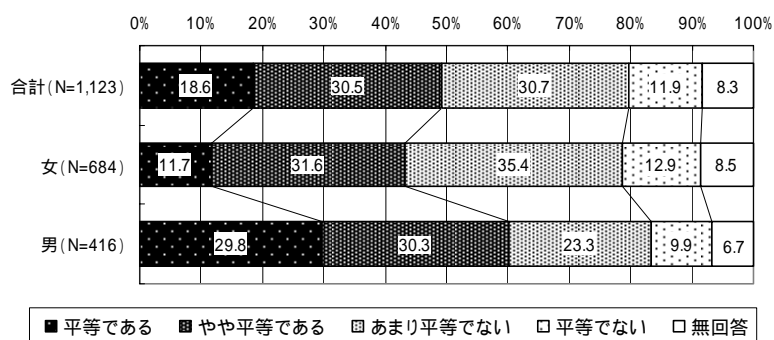
職場（賃金・昇進）



政治・経済の分野



法律や制度

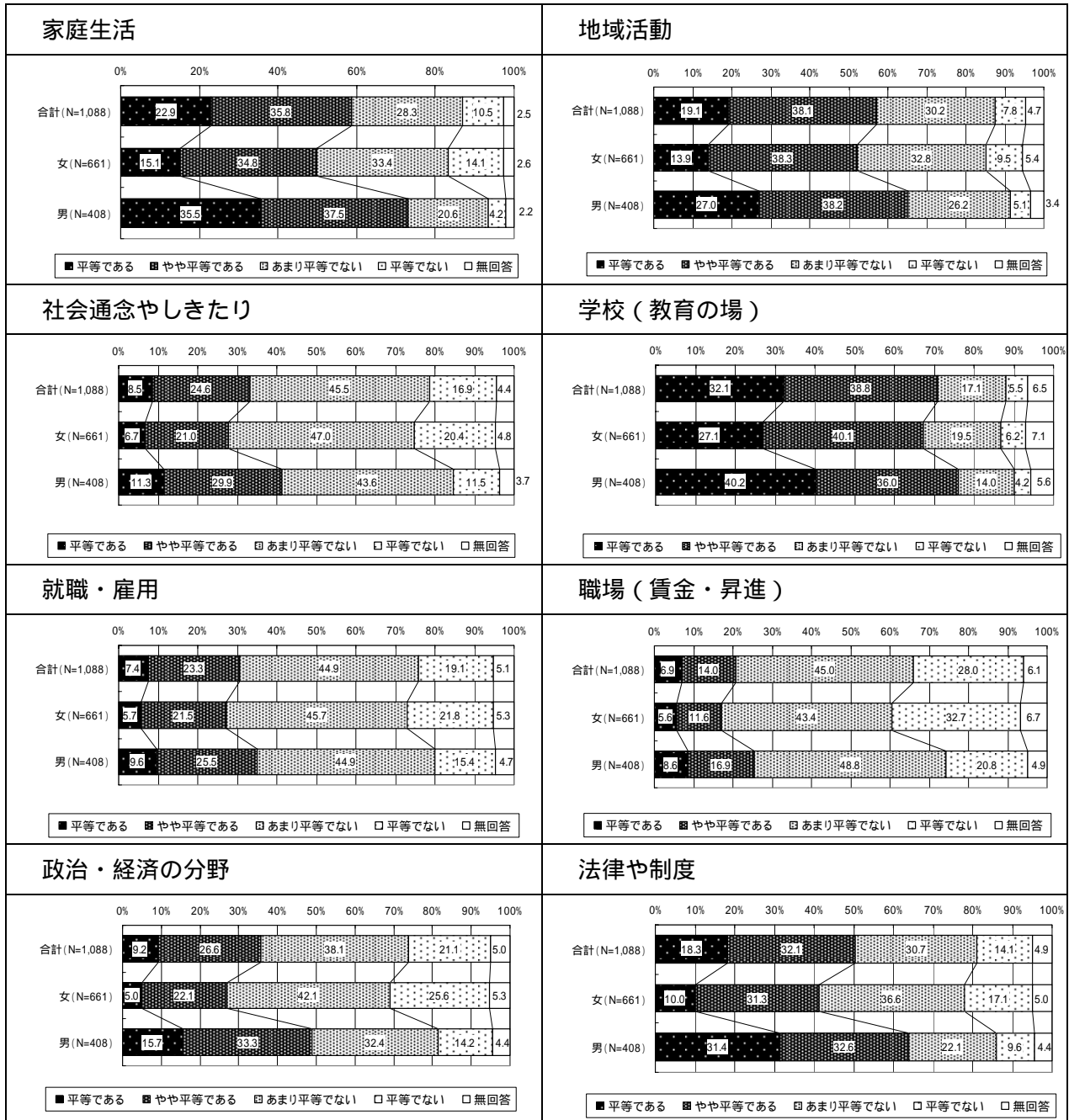


全体で見ると、平等感が高い（「平等である」と「やや平等である」の計が「あまり平等でない」と「平等でない」の計よりも多い）のが、「家庭生活」「地域活動」「学校（教育の場）」「法律や制度」である。不平等感が高い（「あまり平等でない」と「平等でない」の計が「平等である」と「やや平等である」の計よりも多い）のが「社会通念やしきたり」「就職・雇用」「職場（賃金・昇進）」「政治・経済の分野」である。

平等感が最も高いのが、「学校(教育の場)」で、「平等である」「やや平等である」を合わせて71.6%となっている。不平等感が最も高いのは「職場(賃金・昇進)」で、「あまり平等でない」と「平等でない」を合わせて65.2%となっている。

性別にみると、「家庭生活」、「法律や制度」、「政治・経済の分野」は女性の方が不平等感が高い傾向がある。とくに「家庭生活」では「あまり平等でない」と「平等でない」を合わせて女性の回答が男性の回答よりも20ポイント強高くなっている。

< 前回調査 >



前回調査と比較すると、「職場(賃金・昇進)」では「平等である」「やや平等である」を合わせた割合が女性で約8ポイント、男性で約6ポイント増加している。

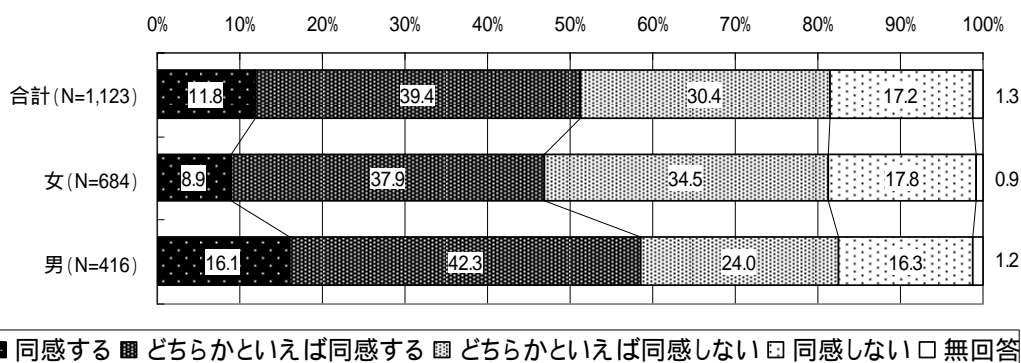
< 国との比較 >

内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成21年10月)と比較すると、国では「平等である」の割合が最も高いのは「学校(教育の場)」で、次いで「地域活動」、「法律や制度」、

「家庭生活」の順になっている。上位の項目は本市の調査結果と同じ傾向がみられる。「平等である」割合が最も低いのは「社会通念やしきたり」、「政治経済の分野」となっている。

(2) 「男は仕事、女は家事・育児」への同意

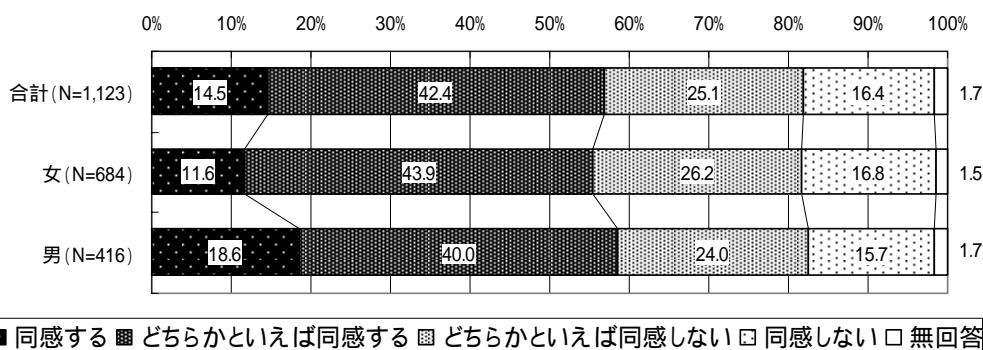
問5 「男は仕事、女は家事・育児」という考え方がありますが、あなたは、この考え方に同感しますか、あるいは同感しませんか。あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。



全体では「同感する」と「どちらかといえば同感する」を合わせた「同意」が51.2%、「どちらかといえば同感しない」と「同感しない」を合わせた「不同意」が47.6%で「同意」が3ポイント高い。

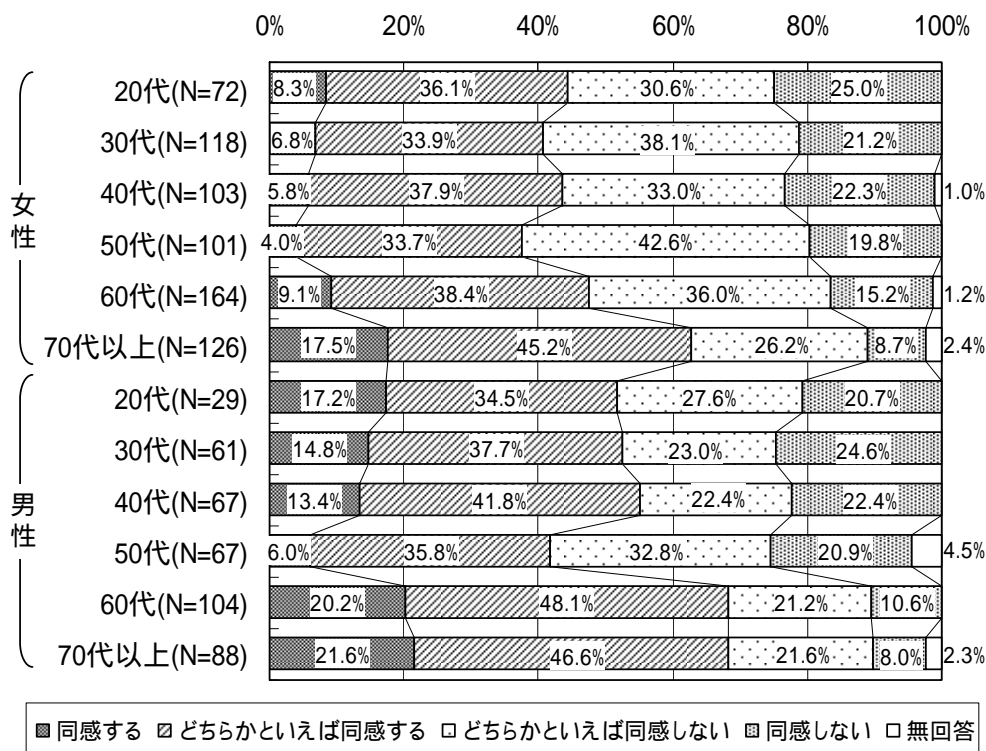
性別にみると「同意」は女性で46.8%、男性で58.4%で男性の方が女性より約12ポイント高い。

< 前回調査 >



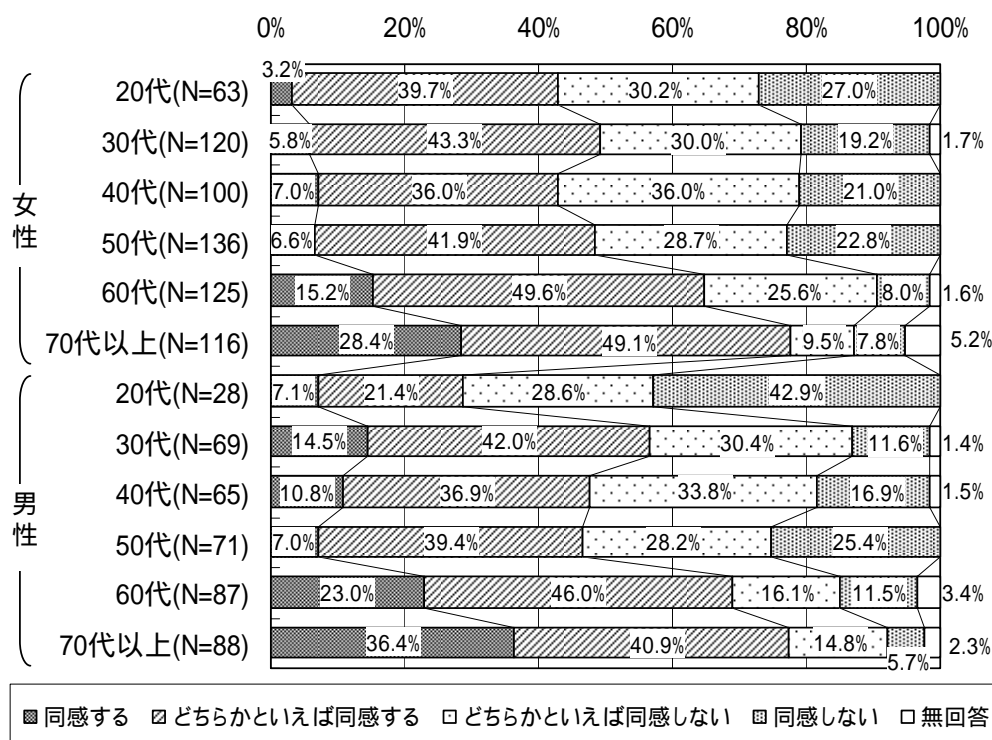
前回調査と比較すると、全体では「同意」の割合は約6ポイント減少している。性別にみると「同意」の割合は女性では約9ポイント減り、男性ではほとんど変化がない。

< 性別年代別 今回調査 >



性別年代別に見ると、女性では70歳代以上でのみ「同意」の割合が「不同意」よりも高いのに対し、男性では20歳代、30歳代、40歳代、60歳代、70歳代以上とほとんどの年代で「同意」の割合が「不同意」よりも高い。

< 性別年代別 前回調査 >



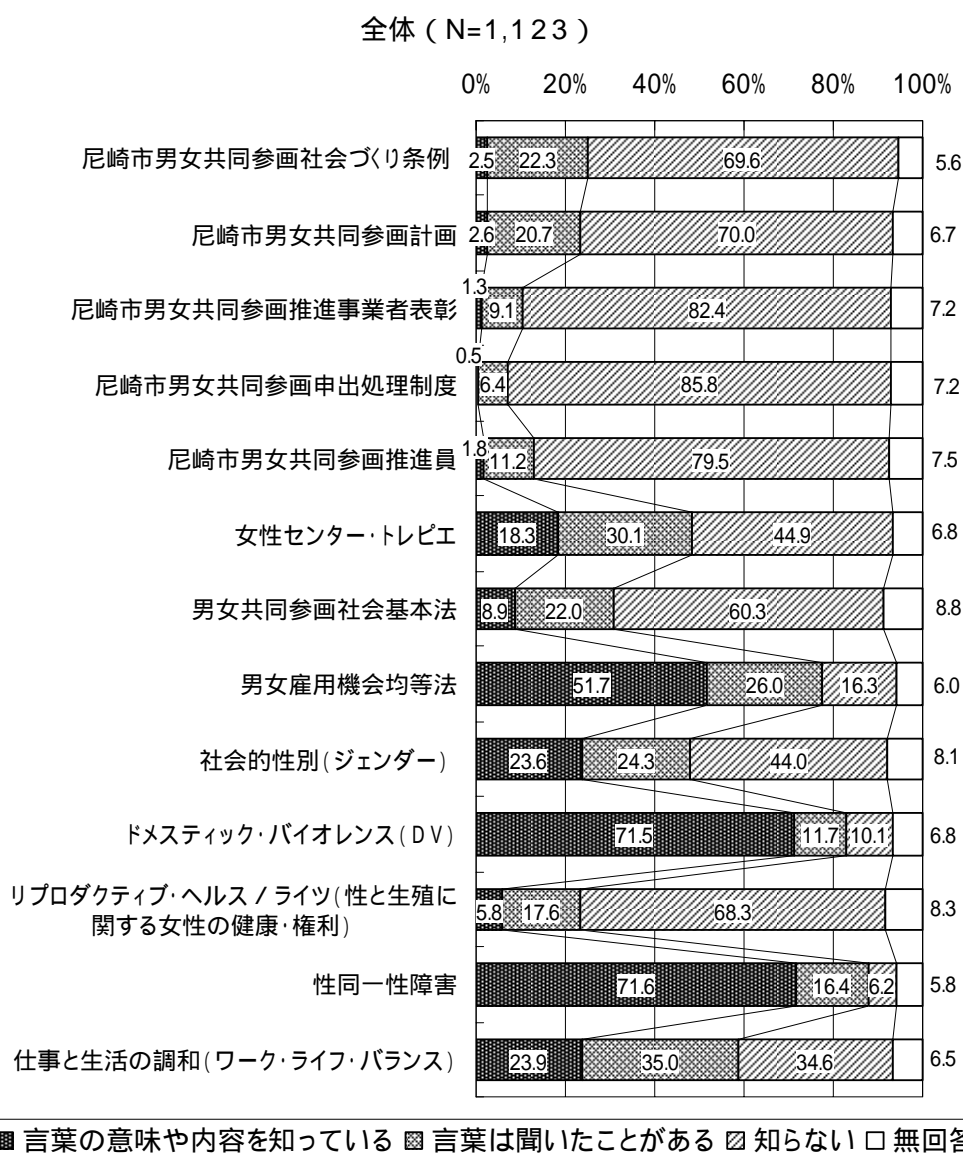
性別年代別を前回調査と比較すると、女性では20歳代、40歳代で、男性では20歳代、40歳代、60歳代で「同意」の割合が高くなっている。「同意する」は20歳代で男女ともに増えている。

< 国との比較 >

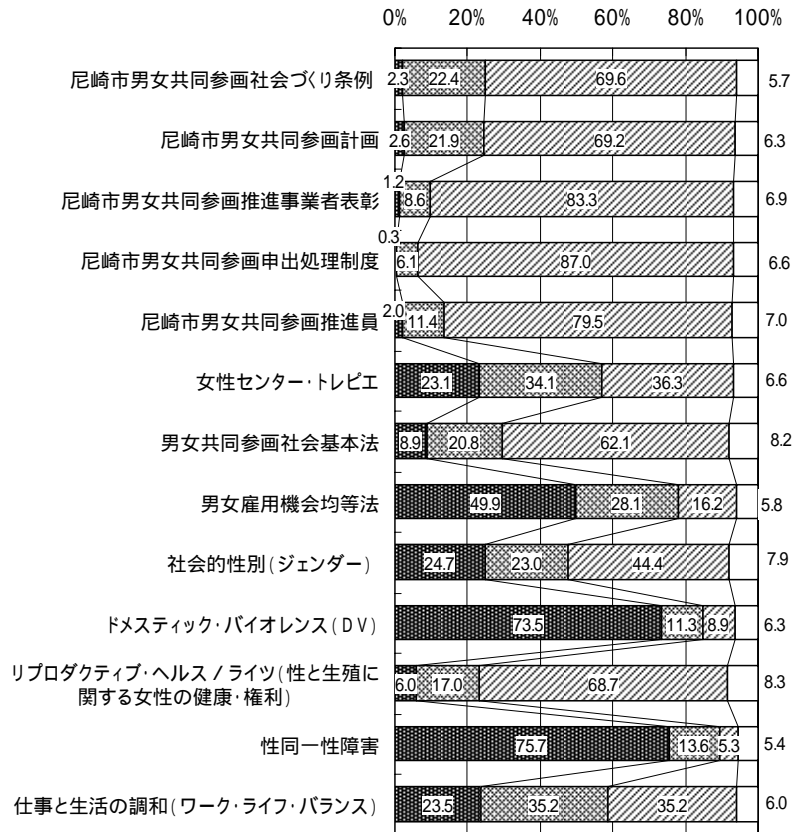
内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成 21 年 10 月)の設問『「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について』の結果と比較した。国の選択項目は「賛成」「どちらかといえば賛成」「どちらかといえば反対」「反対」「わからない」で、本市の項目と表現が違うが、「賛成」「どちらかといえば賛成」を合わせた「賛成」を本市の「同意」と考え比較した。国の「賛成」は 41.3%で本市の「同意」の 51.2%より約 10 ポイント低くなっている。

(3) 男女共同参画に関する言葉の認知度

問 1 3 次の言葉の意味や内容をご存知ですか。それぞれの項目について、あてはまる選択肢の番号に 1 つ をつけてください。

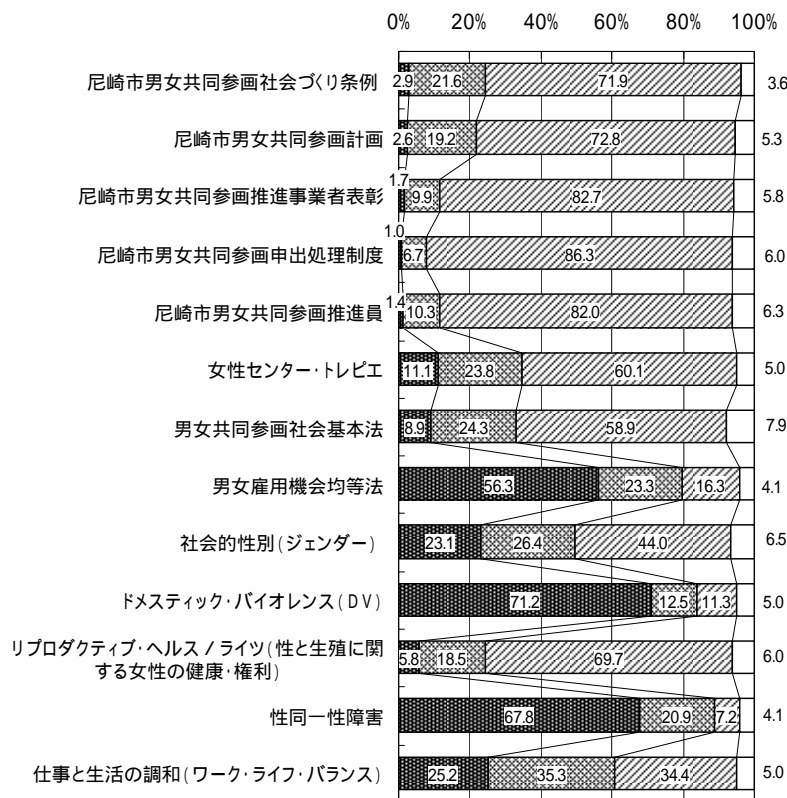


女性 (N=684)



■ 言葉の意味や内容を知っている □ 言葉は聞いたことがある ▨ 知らない □ 無回答

男性 (N=416)

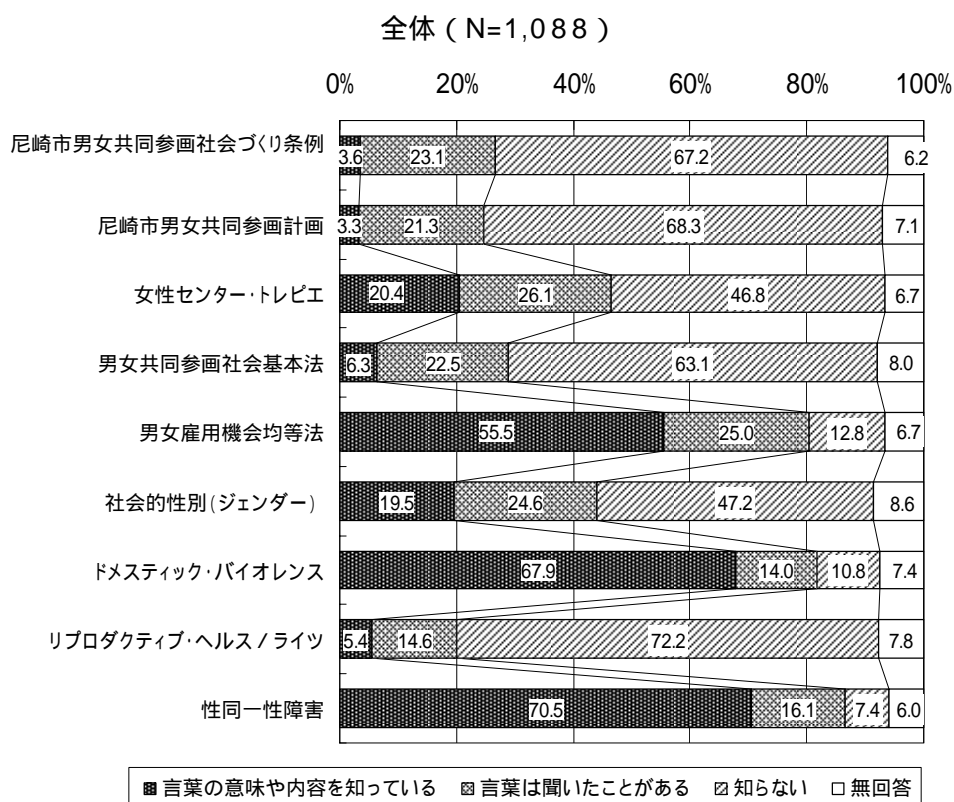


■ 言葉の意味や内容を知っている □ 言葉は聞いたことがある ▨ 知らない □ 無回答

全体では「言葉の意味や内容を知っている」で最も多いのが「性同一性障害」で71.6%、次いで「ドメスティック・バイオレンス(DV)」が71.5%、「男女雇用機会均等法」が51.7%である。「知らない」で最も多いのが「尼崎市男女共同参画申出処理制度」で85.8%、次いで「尼崎市男女共同参画推進事業者表彰」82.4%、「尼崎市男女共同参画推進員」79.5%である。

性別にみると「女性センター・トレピエ」は「言葉の意味や内容を知っている」で女性が男性より12ポイント高い。また「言葉は聞いたことがある」も女性が男性より約10ポイント高い。「男女雇用機会均等法」は「言葉の意味や内容を知っている」で男性が女性よりも約6ポイント高い。「性同一性障害」は「言葉の意味や内容を知っている」で女性が男性よりも約8ポイント高い。

< 前回調査 >



前回調査と比較すると、「言葉の意味や内容を知っている」は「社会的性別(ジェンダー)」で約4ポイント、「ドメスティック・バイオレンス」で約4ポイントと若干増加している。他は若干の減少か、ほぼ変化がみられない。

< 国との比較 >

内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成21年10月)の設問、「男女共同参画に関する用語の認知度」と比較した。用語について見たか聞いたかしたことがあるものを複数回答で聞いている。国の調査で認知度の高いものは「男女雇用機会均等法」79.3%、「DV(配偶者からの暴力)」78.7%、「男女共同参画社会」64.6%が上位3位である。本市の「言葉の意味や内容を知っている」「言葉は聞いたことがある」を合わせた割合と同じと考え比較をすると、上位2位までは国と本市はほぼ割合が一致している。「男女共同参画社会」については同様の項目がない。「社会的性別(ジェンダー)」に関しては国が31.9%で本市の方が認知の割合が高い。

(4) 今後必要なこと

問14 今後、どのようなことが必要だと思われますか。それぞれの項目について、あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

<項目> 下記グラフでは項目を要約

学校教育の中で男女共生教育を推進する

女性が経済力や知識・技術を身につける

職場で労働時間の短縮やフレックスタイム制の導入などを進める

職場で育児休業・介護休業の取得を促進する

政策・方針決定の場、管理職への女性の登用を促進する

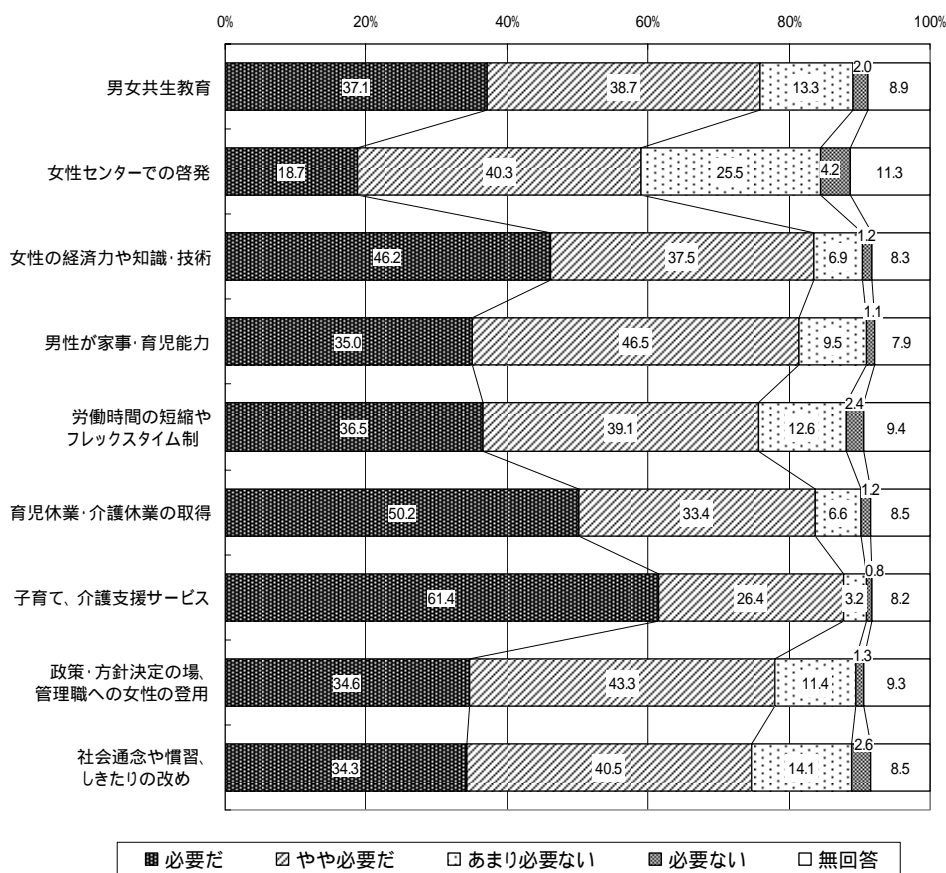
女性センターなどで男女共同参画の啓発を進める

男性が家事や育児を行う能力を身につける

子育て、介護を支援するサービスを充実させる

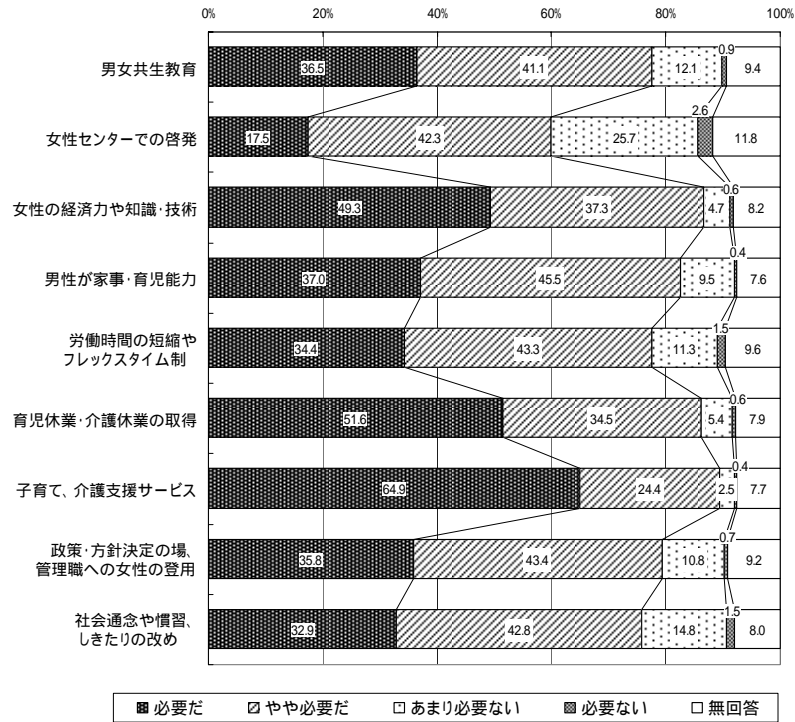
社会通念や慣習、しきたりなどを改める

全体 (N=1,123)

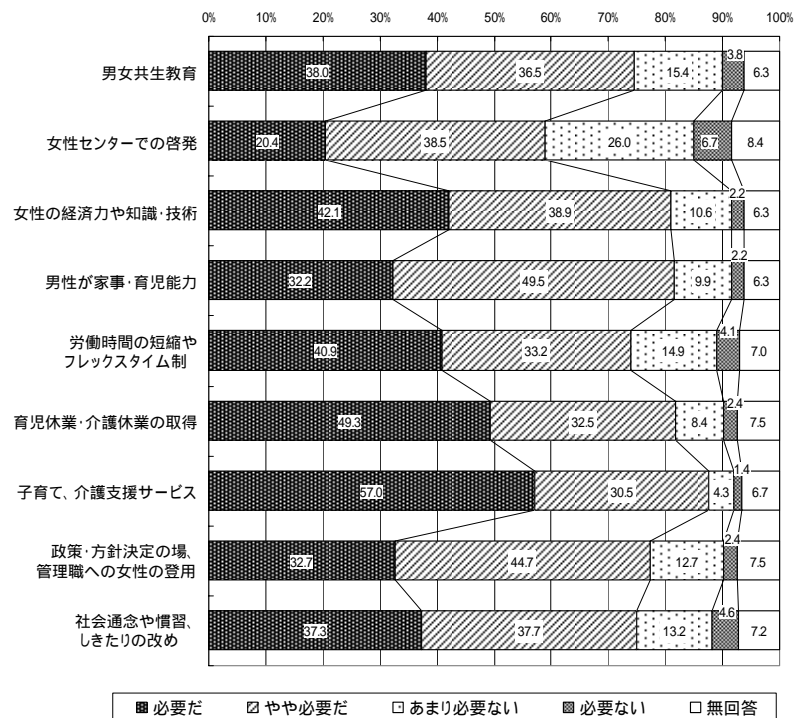


全体では「必要だ」と「やや必要だ」を合わせた割合が最も多いのが「子育て、介護を支援するサービスを充実させる」で 87.8%、次いで「女性が経済力や知識・技術を身につける」が 83.7%、「職場で育児休業・介護休業の取得を促進する」が 83.6%、「男性が家事や育児を行う能力を身につける」が 81.5%などとなっている。またすべての項目について「必要だ」と「やや必要だ」を合わせた回答が「あまり必要ない」と「必要ない」を合わせた回答よりも多い。

女性 (N=684)



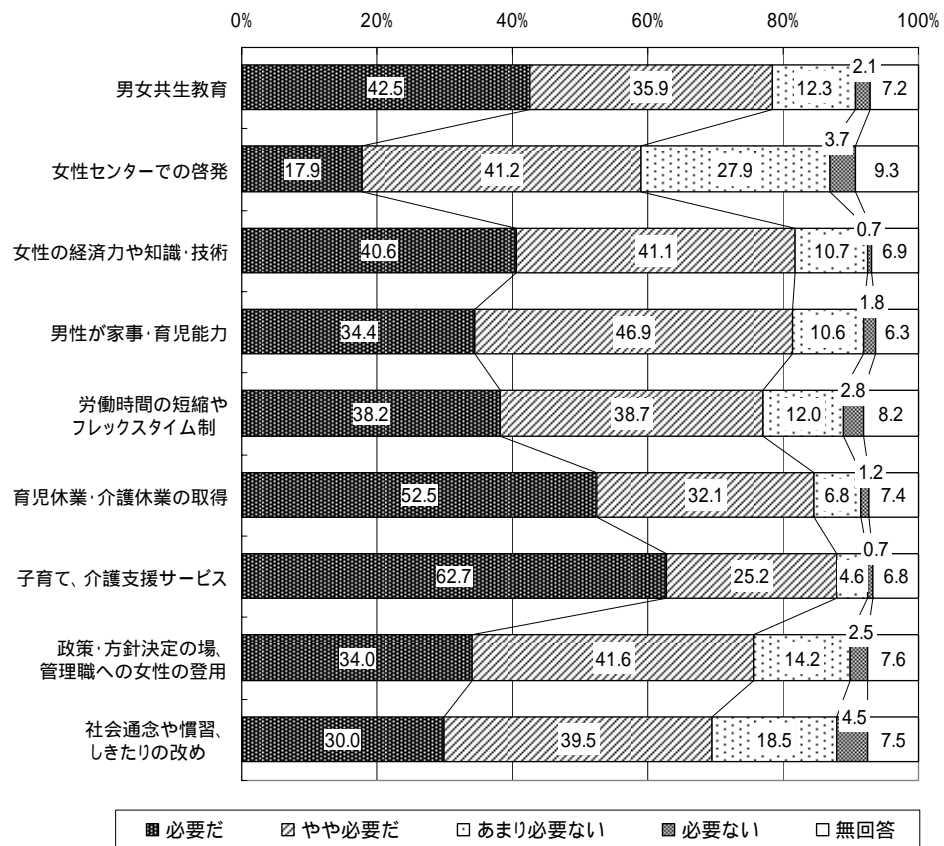
男性 (N=416)



性別にみると「子育て・介護を支援するサービスを充実させる」は「必要だ」で女性が男性より約8ポイント高い。「女性が経済力や知識・技術を身につける」は「必要だ」で女性が男性より約7ポイント高い。「職場で労働時間の短縮やフレックスタイム制の導入などを進める」は「必要だ」で男性が女性より約7ポイント高い。

< 前回調査 >

全体 (N=1,088)

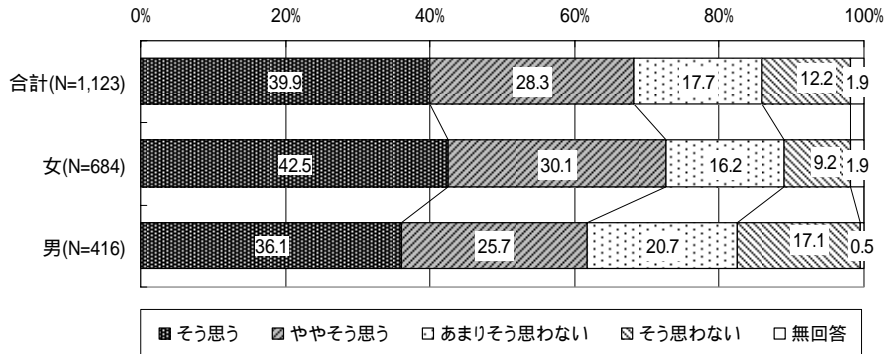


前回調査と比較すると、大きな上位での順位の変化は見られないが、「女性が経済力や知識・技術を身につける」の「必要だ」は約6ポイント増加している。また「学校教育の中で男女共生教育を推進する」の「必要だ」は約5ポイント減少している。

(5) 結婚の考え方

問17 結婚について、次のような考え方をあなたはどのように思いますか。あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

ア．結婚は個人の自由であるから、必ずしも結婚しなくてもよい

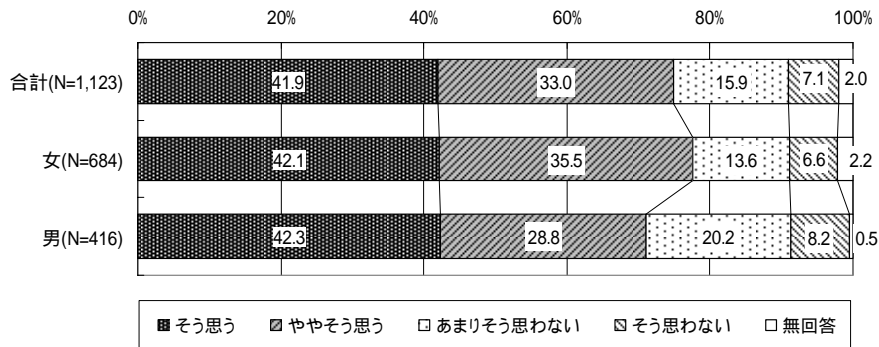


全体では「そう思う」が39.9%と最も多く、次いで「ややそう思う」が28.3%で、合わせて68.2%である。性別でみると「そう思う」「ややそう思う」を合わせて、女性では72.6%で男性の61.8%より約11ポイント高い。

< 前回調査 >

前回調査と比較すると「そう思う」「ややそう思う」合わせた割合は約3ポイント増加しているが大きな変化はない。

イ．結婚してもうまくいかなければ、離婚してやり直す方がよい



全体では「そう思う」が41.9%で最も多く、次いで「ややそう思う」が33.0%で合わせて74.9%である。

性別にみると「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて女性では77.6%で男性の71.1%より約7ポイント高い。

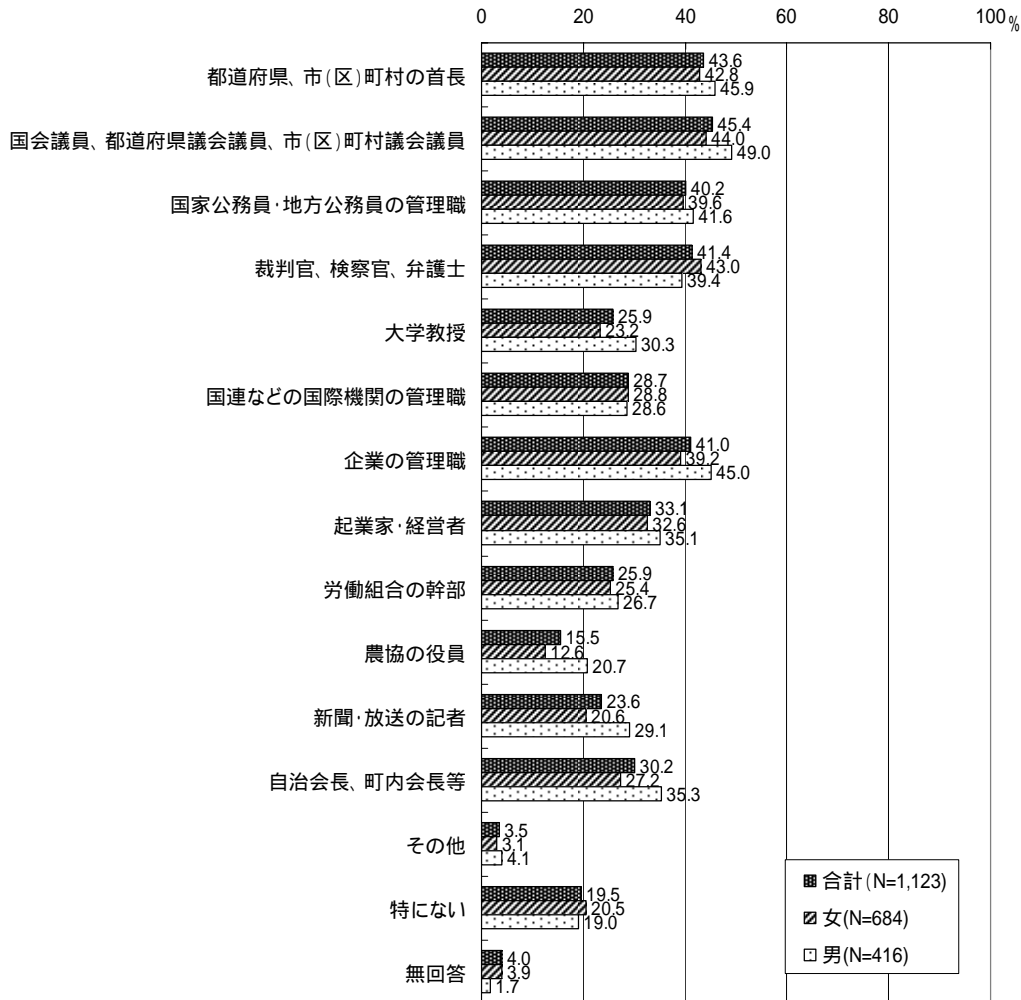
< 前回調査 >

前回調査と比較すると「そう思う」「ややそう思う」を合わせた割合は3ポイント増えているが大きな変化はない。男性では「そう思う」が約8ポイント高くなっている。

3. 政策・方針の企画決定における女性の参画拡大

(1) 女性が増えるとよい職業・役職

問15 次にあげるような職業や役職において、今後女性が増える方がよいと思うのはどれですか。あてはまる選択肢の番号にすべてをつけてください。



全体では「国会議員、都道府県議会議員、市(区)町村議会議員」が45.4%で最も多く、次いで「都道府県、市(区)町村の首長」が43.6%、「裁判官、検察官、弁護士」が41.4%などとなっている。

性別にみると「裁判官、検察官、弁護士」では女性が男性よりも約4ポイント高い。「国会議員、都道府県議会議員、市(区)町村議会議員」では男性が女性より5ポイント高い。「大学教授」「企業の管理職」「農協の役員」「新聞・放送の記者」「自治会長、町内会長等」では男性が女性より約6~9ポイント高くなっている。

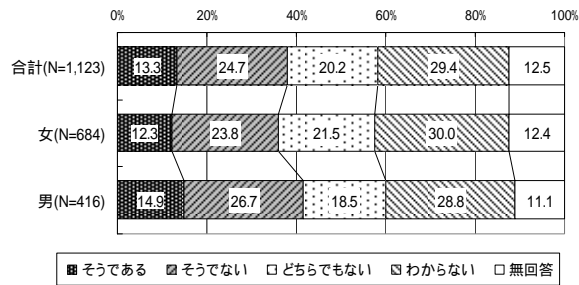
(2) 地域活動における男女の役割分担

問10 地域活動における男女の役割分担についてうかがいます。単位福祉協会(自治会) ボランティアなどの地域活動における実態とあなたの考えに関して、それぞれの項目について、一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

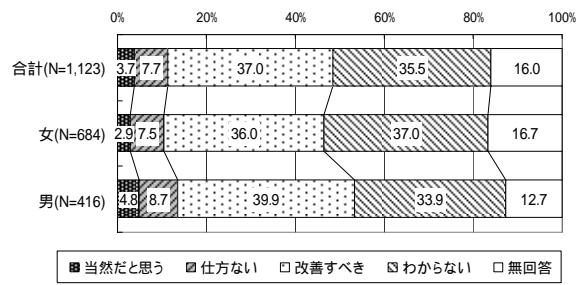


女性の発言が少ない

現実

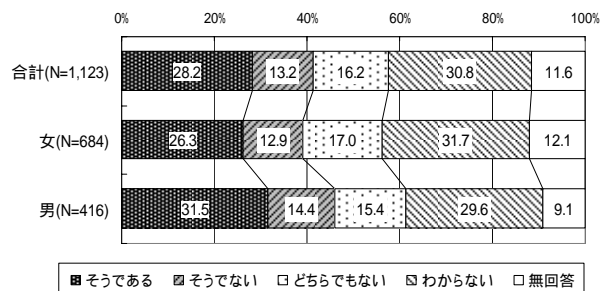


意識

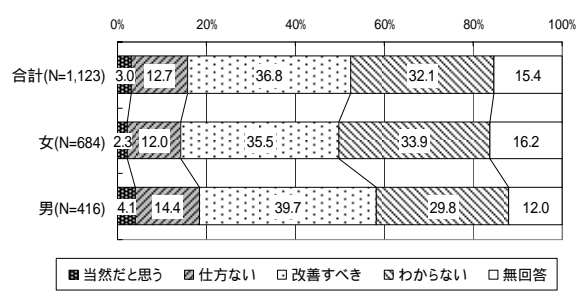


男性の参加が少ない

現実



意識



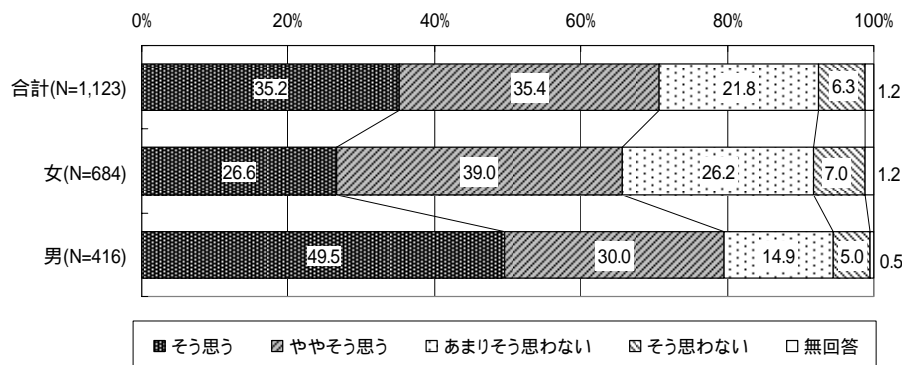
全体では、現実について「そうである」の割合が高いのは「団体の長には男性が就く」「男性の参加が少ない」である。意識について「当然だと思う」の割合が高いのは「団体の長には男性が就く」である。「改善すべき」がいずれの項目も40%前後ある。

4. ワーク・ライフ・バランスの確立

(1) 子育ての考え方

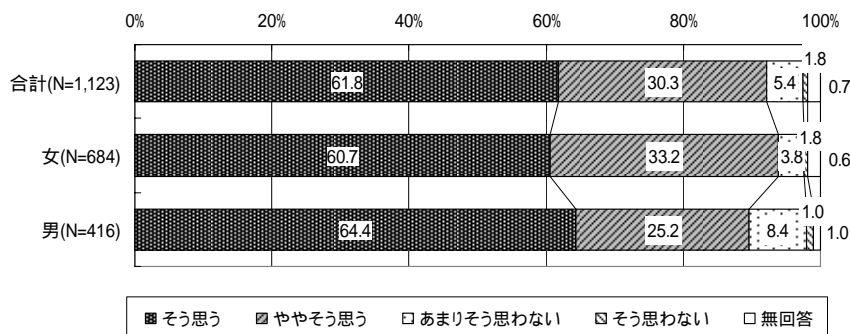
問2 子育てについての次のような考え方をどう思いますか。あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

ア. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるのがよい



全体では「そう思う」「ややそう思う」合わせて70.6%である。性別にみると「そう思う」は男性が女性より約23ポイント高い。

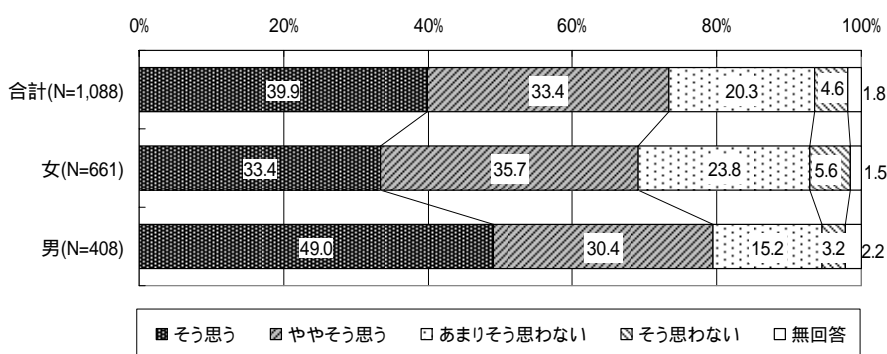
イ．男女区別せず、個人の能力や性格に応じて、その子らしく育てるのがよい



全体では「そう思う」「ややそう思う」合わせて 92.1%である。性別にみると「そう思う」は男性が女性より約 4 ポイント高い。

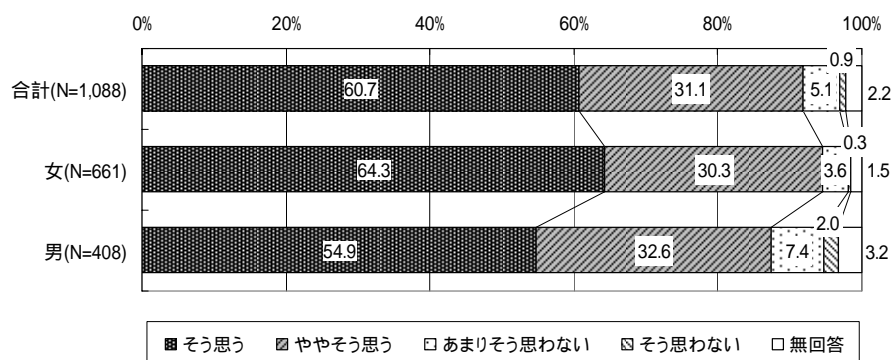
< 前回調査 >

ア．男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるのがよい



前回調査と比較すると全体では大差がない。性別では女性の「そう思う」が 7 ポイント減少している。

イ．男女区別せず、個人の能力や性格に応じて、その子らしく育てるのがよい

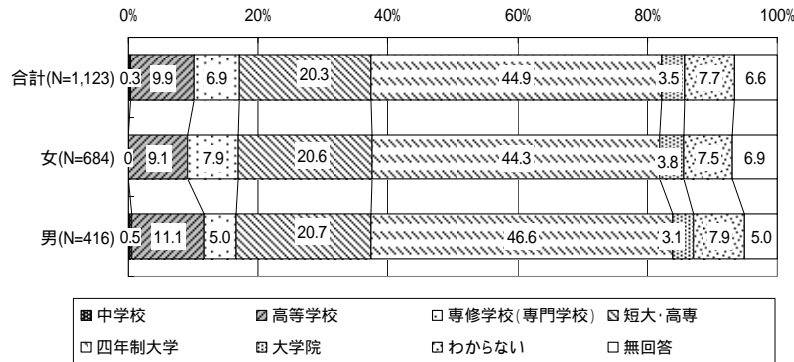


前回調査と比較すると全体では大差がない。性別では男性の「そう思う」が約 10 ポイント増加している。

(2) 子どもに受けさせたい教育程度

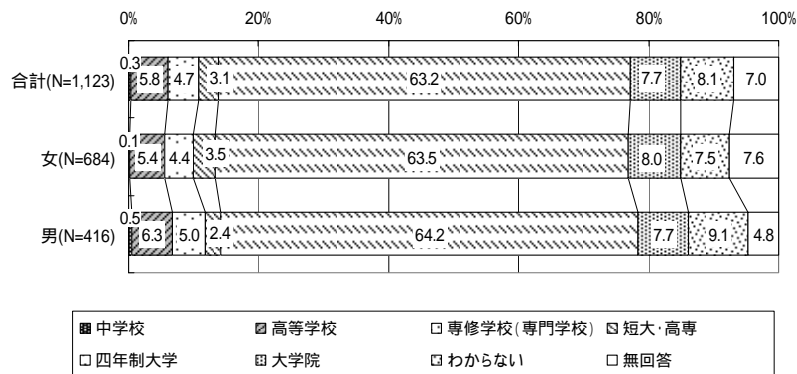
問3 あなたは自分の子どもに、どの程度まで教育を受けさせたい(受けさせたかった)ですか。それぞれの項目について、あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

女の子の場合



全体では「四年制大学」が44.9%で最も多く、次いで「短大・高専」が20.3%、「高等学校」が9.9%などとなっている。性別にみると大差はない。

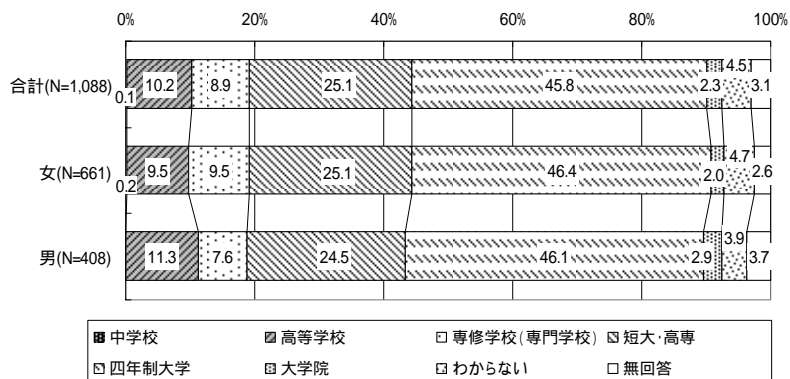
男の子の場合



全体では「四年制大学」が63.2%で最も多く、次いで「わからない」が8.1%、「大学院」が7.7%などとなっている。性別にみると大差はない。

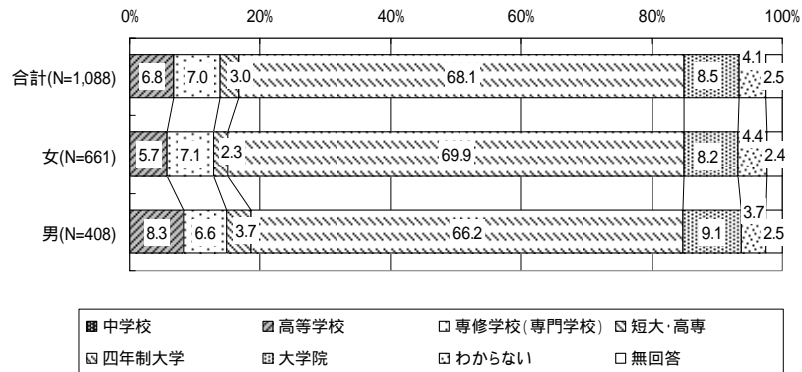
< 前回調査 >

女の子の場合



前回調査と比較すると順位の変化はないが、「短大・高専」の割合は約5ポイント減少した。

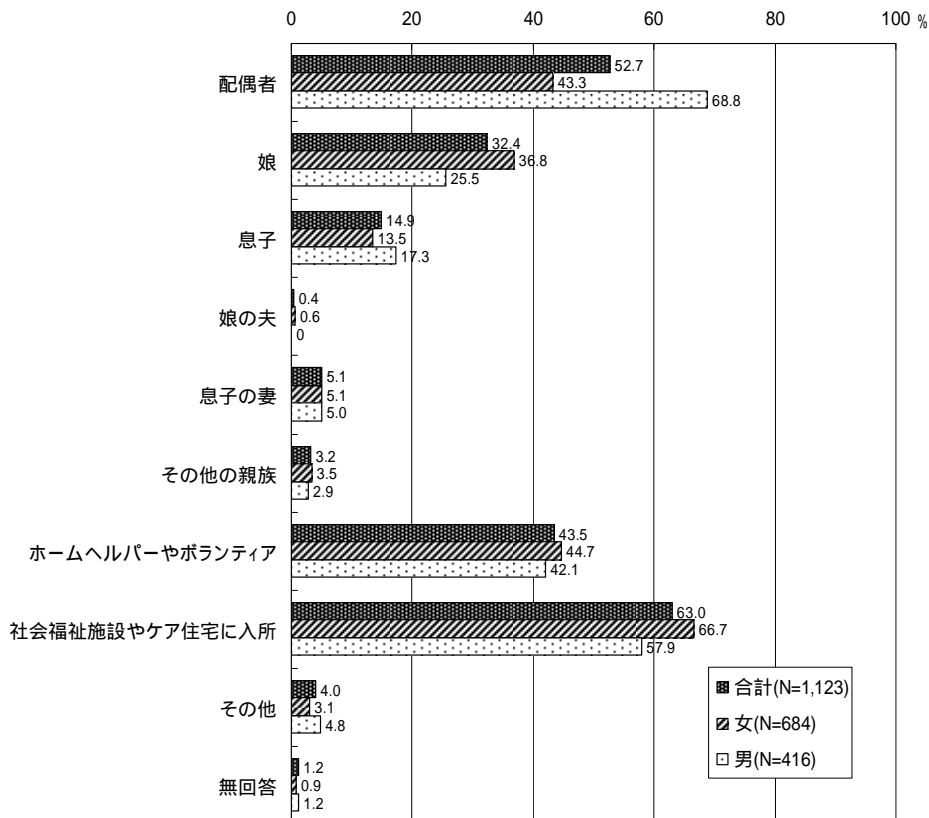
男の子の場合



前回調査と比較すると全体では「四年制大学」の割合が約5ポイント減少している。

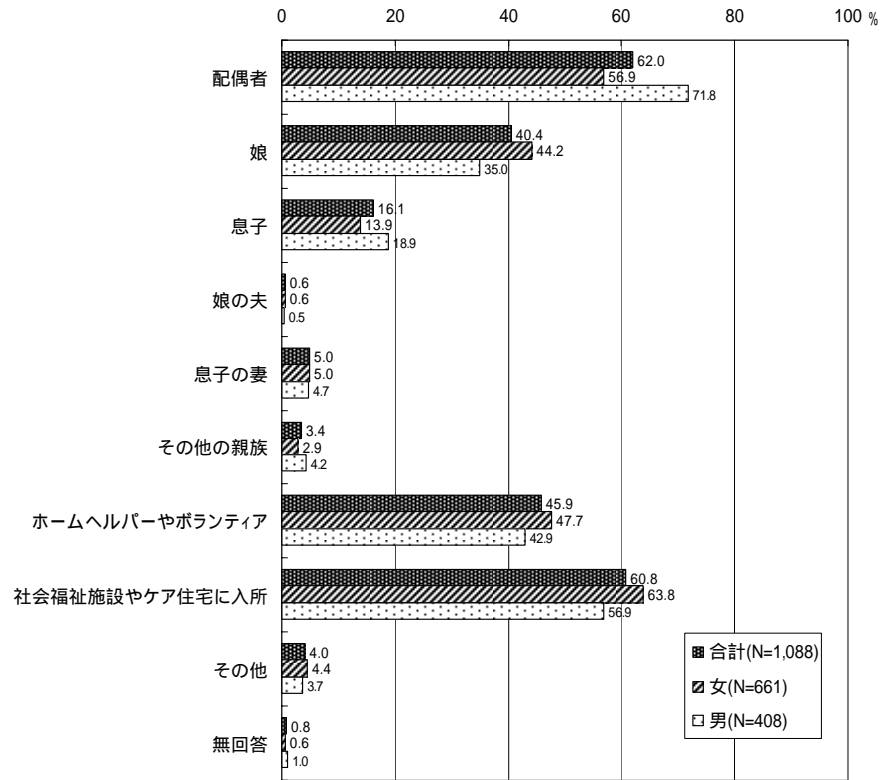
(3) 高齢者になった時の身の回りの世話の希望

問4 あなたが高齢になって、もし寝たきりや認知症になったら、主に、誰に(どこで)身の回りの世話をしてもらいたと思いますか。あてはまる選択肢の番号に3つまでをつけてください。



全体では「社会福祉施設やケア住宅に入所」が63.0%で最も多く、次いで「配偶者」が52.7%、「ホームヘルパーやボランティア」が43.5%などとなっている。性別にみると「社会福祉施設やケア住宅に入所」では女性が男性より約9ポイント高い。「配偶者」では男性が女性より約26ポイント高い。また女性は「娘」で男性よりも約11ポイント高い。

< 前回調査 >



前回調査と比較すると、前は「配偶者」が最も多かったが、今回は約9ポイント減少している。性別でも「配偶者」では女性が今回約14ポイント減少している。

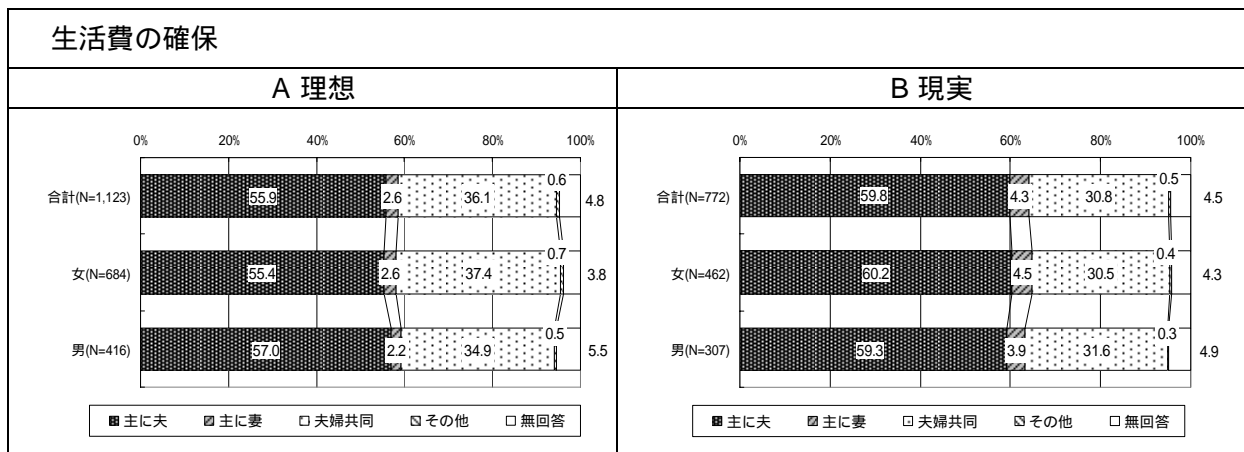
(4) 家庭での役割分担

問6 日常的な家庭の仕事の分担についてうかがいます。

「A 理想」は全員の方がお答えください。

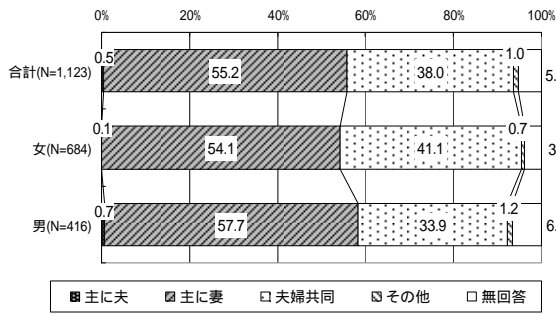
「B 現実」は配偶者のいる方のみお答えください。子どもやお年寄り、病人に関する項目は、該当する方のみお答えください。

それぞれの項目について、あなたの考えや実際の分担に一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

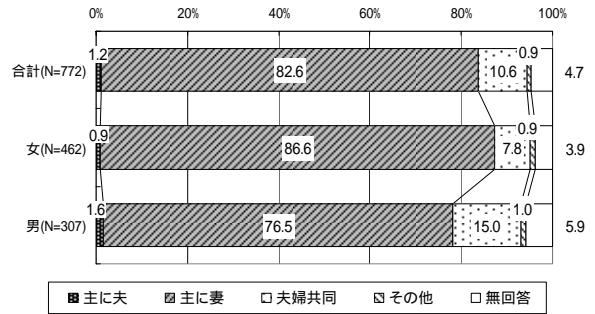


食事の支度

A 理想

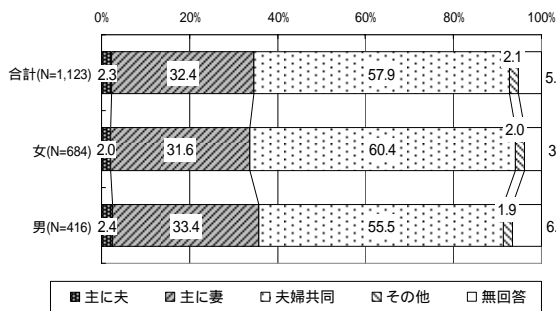


B 現実

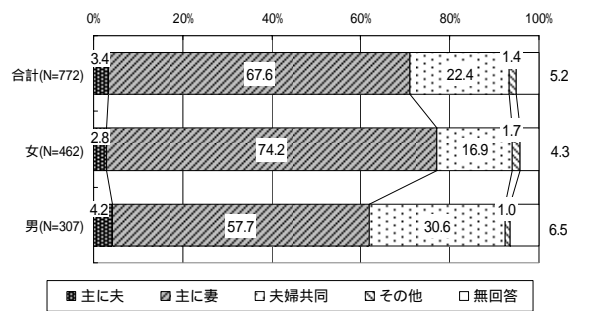


食事の後片付け

A 理想

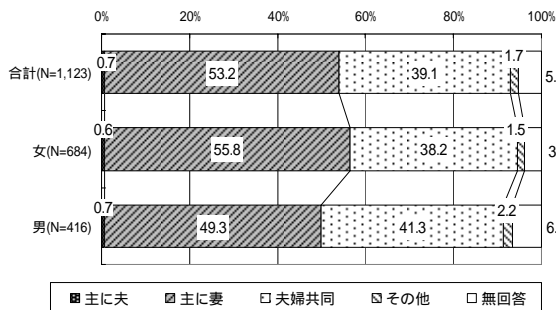


B 現実

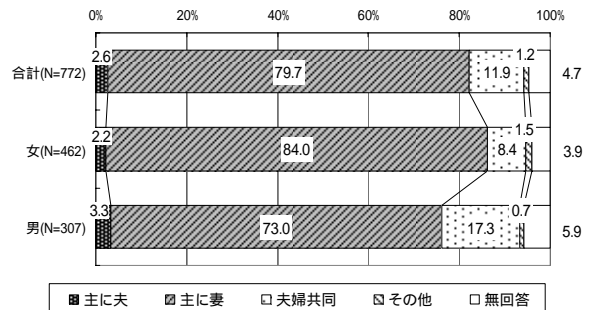


洗濯

A 理想

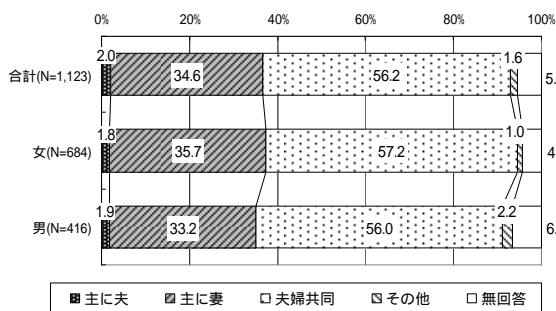


B 現実

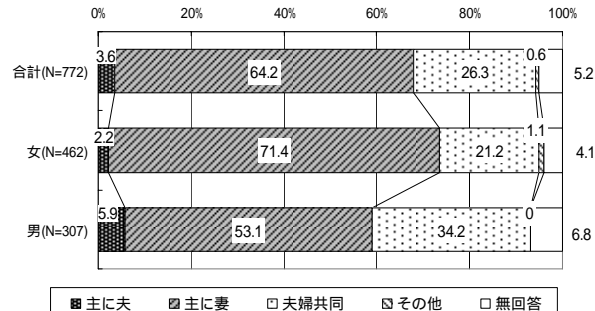


掃除

A 理想

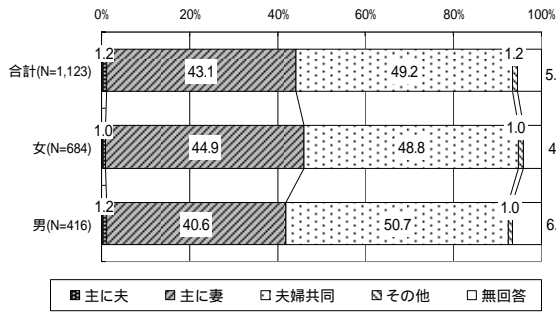


B 現実

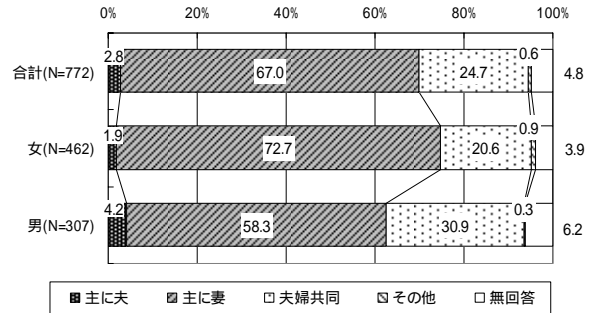


日常の買い物

A 理想

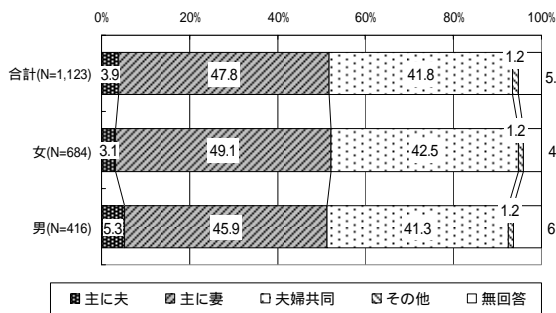


B 現実

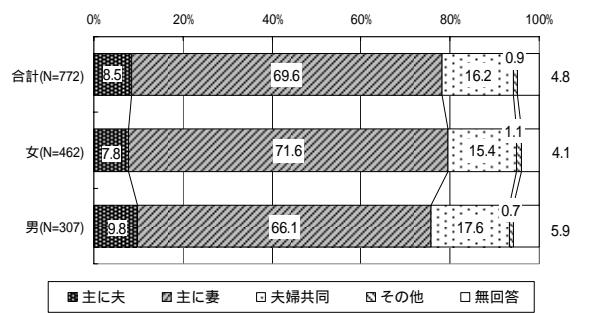


家計管理

A 理想

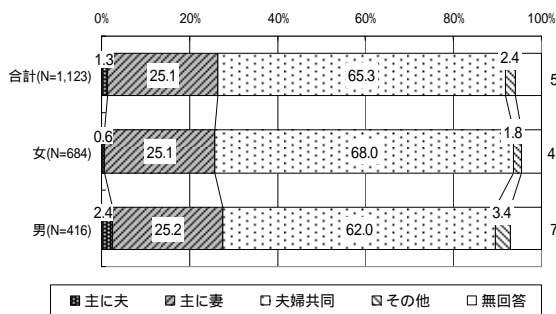


B 現実

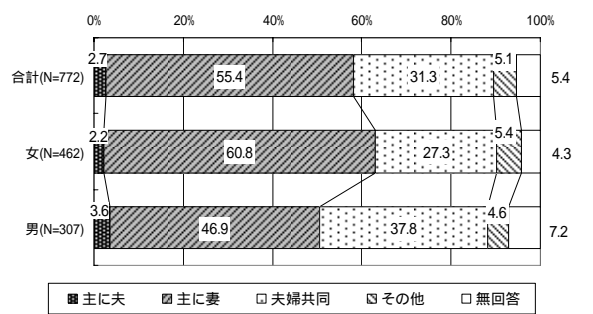


近所とのつきあい

A 理想

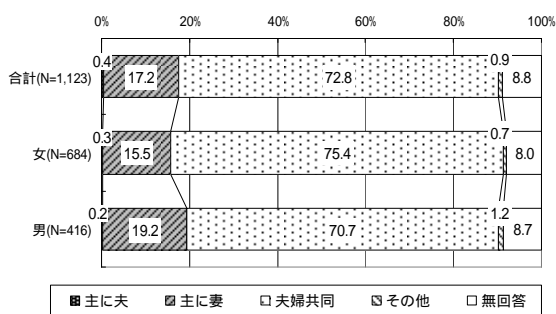


B 現実

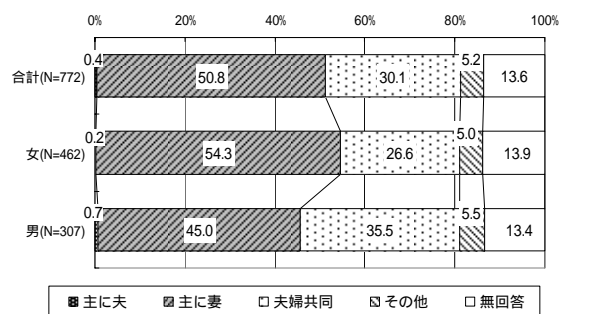


子どもの世話

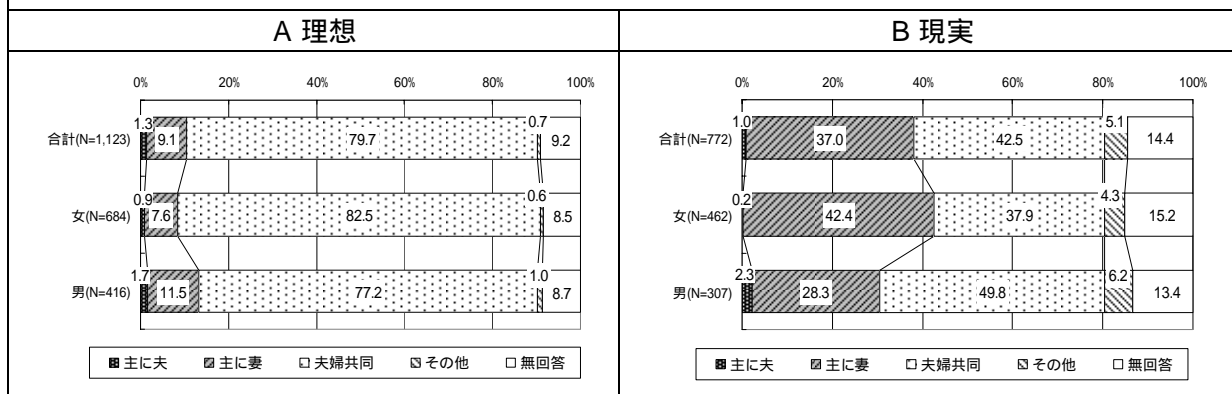
A 理想



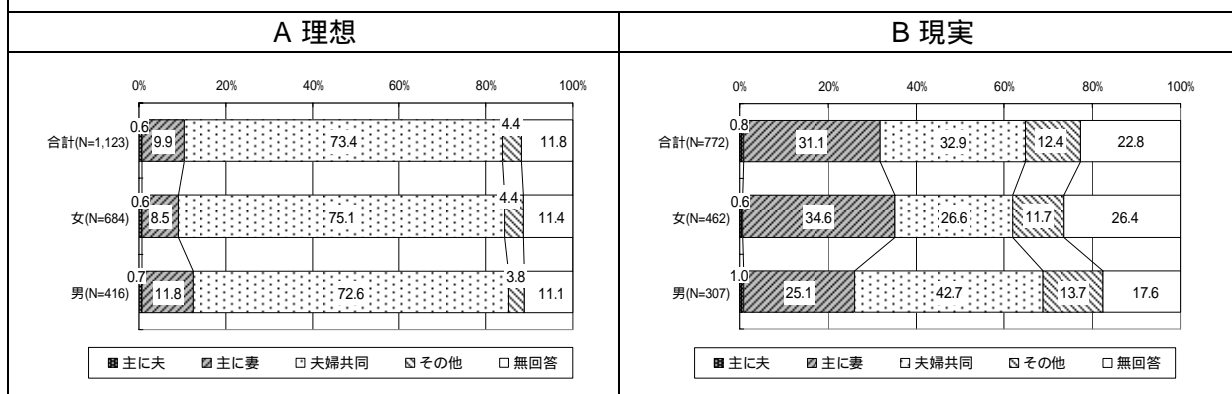
B 現実



子どものしつけ・教育



お年寄りや病人の世話・介護



A理想について、全体では「夫婦共同」が最も多いのが11項目中7項目あり「子どものしつけ・教育」「お年寄りや病人の世話・介護」「子どもの世話」「近所とのつきあい」「食事の後片付け」「掃除」「日常の買い物」となっている。

また「主に夫」が最も多いのは、「生活費の確保」のみとなっている。「主に妻」が最も多いのは「食事の支度」「洗濯」「家計管理」の3項目である。

B現実について、全体では「主に妻」が最も多いのは11項目中8項目であり「食事の支度」「洗濯」「家計管理」「食事の後片付け」「日常の買い物」「掃除」「近所とのつきあい」「子どもの世話」となっている。「夫婦共同」が最も多いのは「子どものしつけ・教育」「お年寄りや病人の世話・介護」である。「主に夫」が最も多いのは「生活費の確保」のみとなっている。

またB現実では女性が「主に妻」、男性が「夫婦共同」と回答する傾向がみられる。

「食事の支度」「食事の後片付け」「洗濯」「掃除」「日常の買い物」「近所とのつきあい」「子どものしつけ・教育」「お年寄りや病人の世話・介護」ではについては「主に妻」及び「夫婦共同」の回答について性別による差が10ポイント以上みられる。

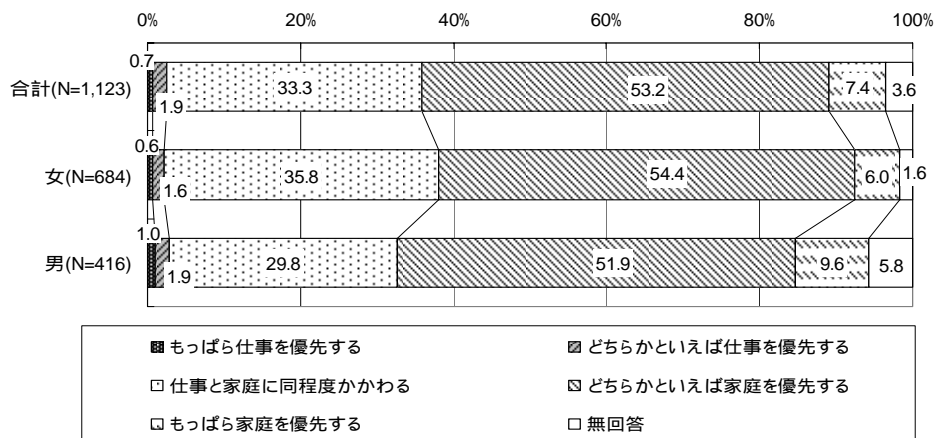
前回調査

前回調査と比較すると、全体は、A理想について「生活費の確保」「食事の支度」「食事の後片付け」「洗濯」「掃除」「家計管理」で「夫婦共同」の割合が5ポイント以上増加している。

(5) 仕事と家庭の関わり方

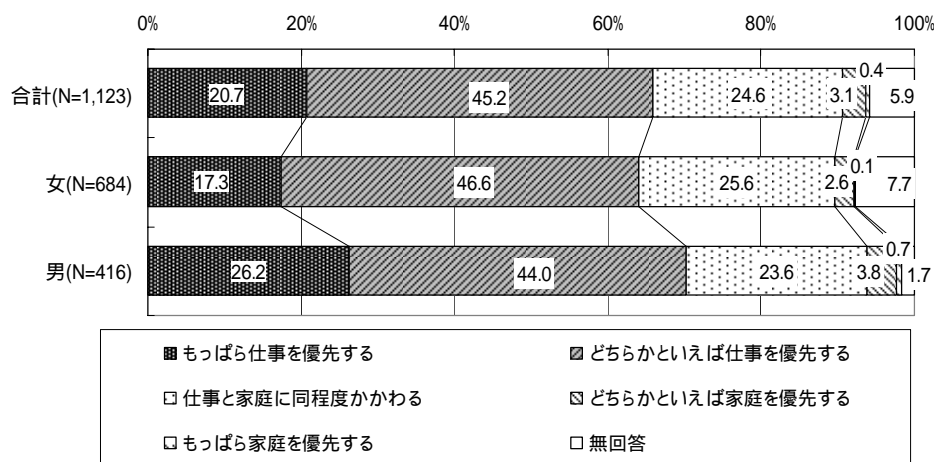
問7 現状はともかく、女性、男性それぞれの仕事と家庭の関わり方は、どのような形が好ましいと思いますか。あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

女性の関わり方



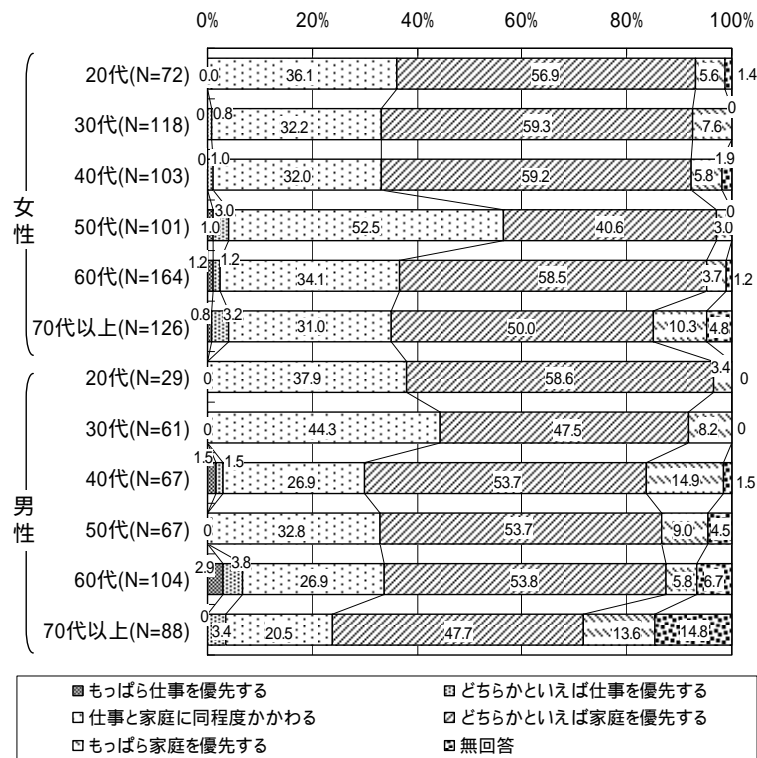
全体では「どちらかといえば家庭を優先する」が 53.2%で最も多く、次いで「仕事と家庭に同程度かかわる」が 33.3%、「もっぱら家庭を優先する」が 7.4%などとなっている。
性別にみると「仕事と家庭に同程度かかわる」は女性が男性より 6 ポイント高い。

男性の関わり方



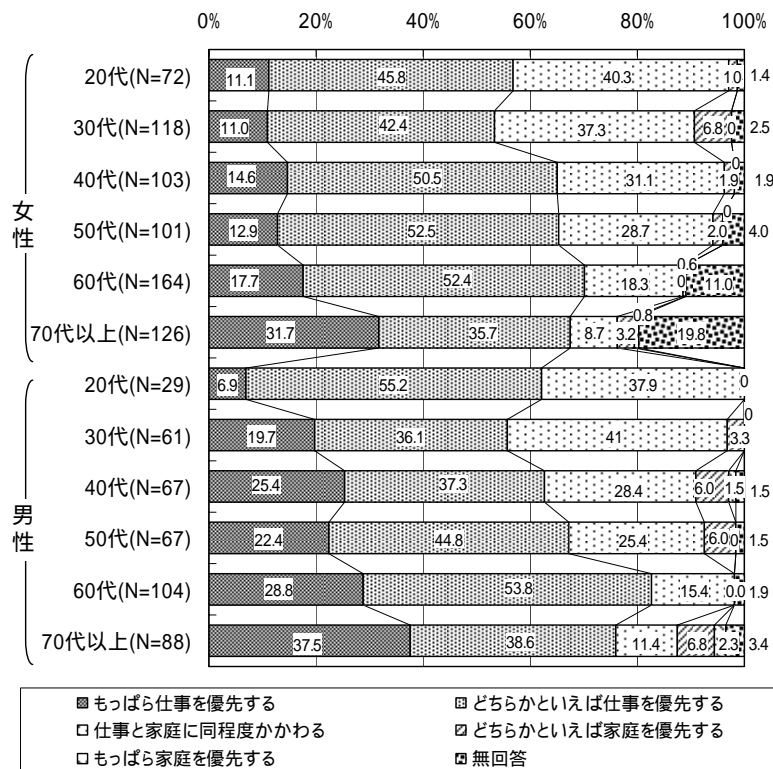
全体では「どちらかといえば仕事を優先する」が 45.2%で最も多く、次いで「仕事と家庭に同程度かかわる」が 24.6%、「もっぱら仕事を優先する」が 20.7%などとなっている。
性別にみると「もっぱら仕事を優先する」は男性が女性より約 9 ポイント高い。
「もっぱら仕事を優先する」と「どちらかといえば仕事を優先する」を合わせた「仕事を優先する」割合は男性の方が女性より 6 ポイント高い。

<性別年代別>
女性の関わり方



性別年代別にみると、女性の 50 歳代で「仕事と家庭に同程度かかわる」が 52.5%で他より高い。また男性の 30 歳代では「仕事と家庭に同程度かかわる」が 44.3%で他より高い。

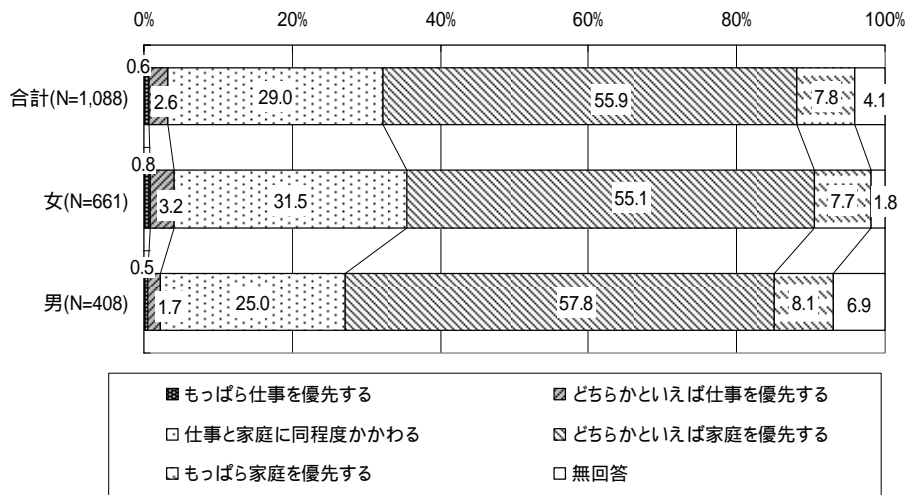
男性の関わり方



性別年代別にみると、男女共に 70 歳代以上で「もっぱら仕事を優先する」が他より高くなっている。「仕事を優先する」割合は男女共に 60 歳代で最も高い。

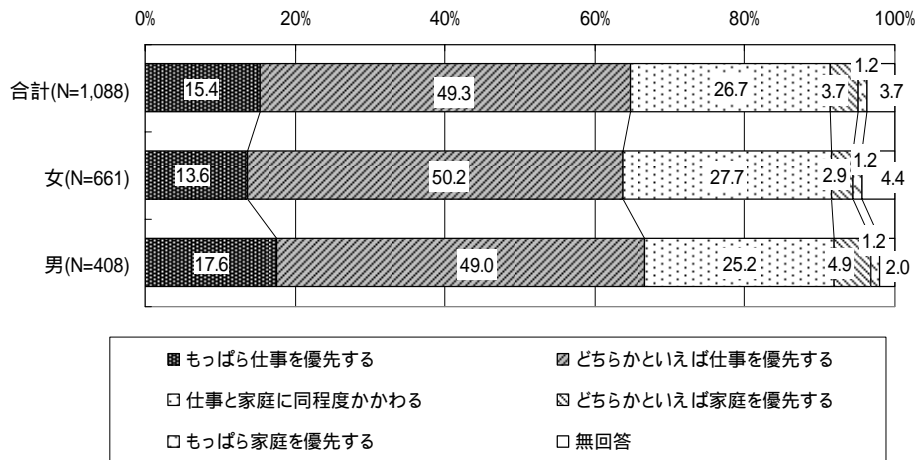
< 前回調査 >

女性の関わり方



前回調査と比較すると全体では大差はない。性別にみると男性の「どちらかといえば家庭を優先する」が約6ポイント減少している。

男性の関わり方



前回調査と比較すると全体では大差はない。性別にみると男性の「もっぱら仕事を優先する」が約9ポイント増加している。

(6) 育児・介護休業の取得方法

問8 育児休業や介護休業についてうかがいます。

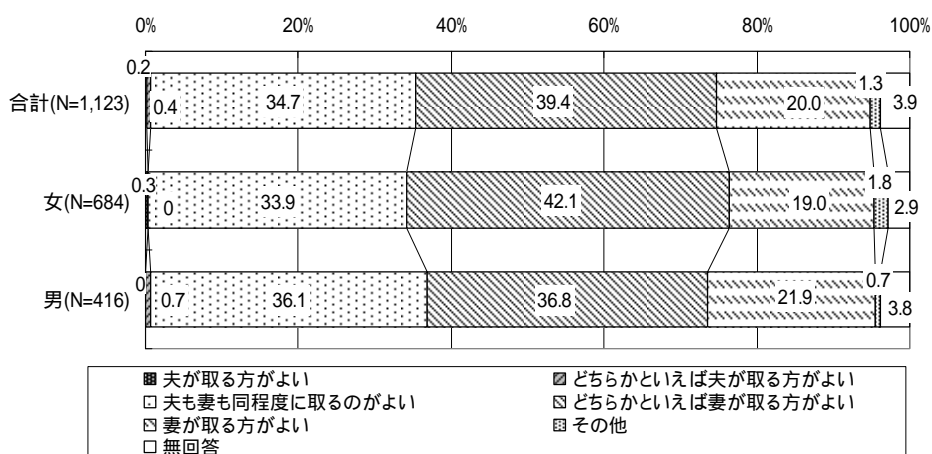
家庭で育児や介護が必要なとき、共に勤めのある夫婦が育児休業や介護休業を取るとしたら、どうするのがよいと思いますか。あなたの考えに一番近い選択肢の番号に1つをつけてください。

(付問) 配偶者のいる方で、夫婦共にお勤めの方にうかがいます。

あなたの職場では、育児休業、介護休業を実際に取得することはできそうですか。または、取得できましたか。あてはまる選択肢の番号に1つをつけてください。

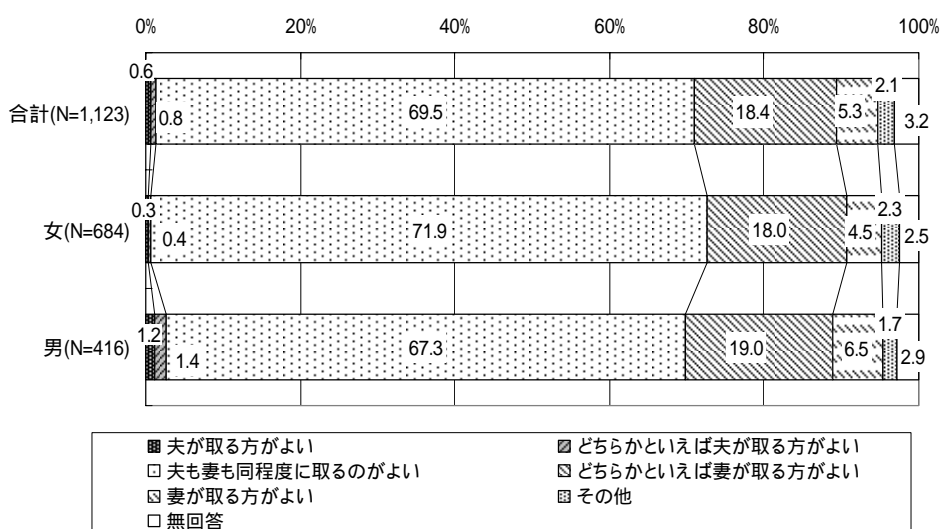
ア．育児休業・介護休業の取得方法

育児休業



全体では「どちらかといえば妻が取る方がよい」が39.4%で最も多く、次いで「夫も妻も同程度に取るのがよい」が34.7%、「妻が取る方がよい」が20.0%などとなっている。性別にみると「どちらかといえば妻が取る方がよい」は女性が男性より約5ポイント高い。

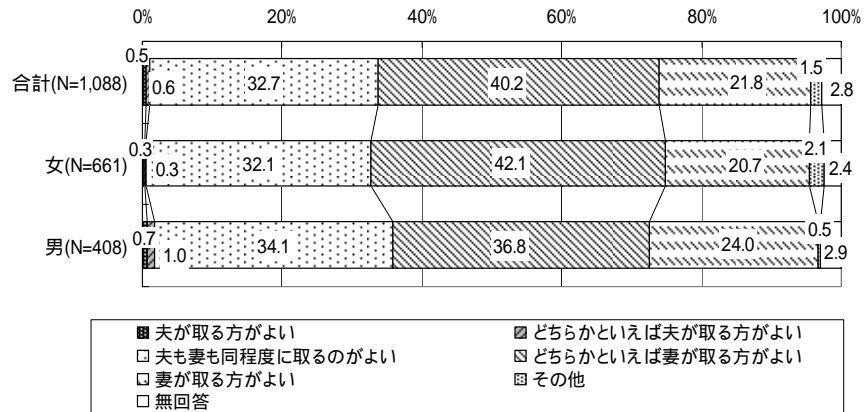
介護休業



全体では「夫も妻も同程度に取るのがよい」が69.5%で最も多く、次いで「どちらかといえば妻が取る方がよい」が18.4%、「妻が取る方がよい」が5.3%などとなっている。性別にみると大差はない。

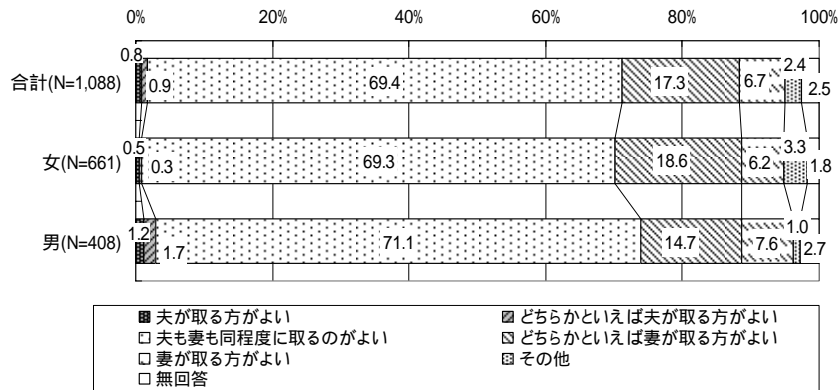
< 前回調査 >

育児休業



前回調査と比較するとほとんど大差はない。

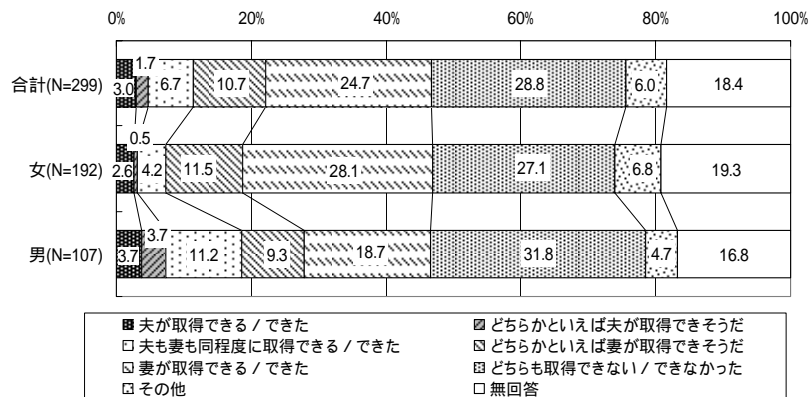
介護休業



前回調査と比較すると全体では大差はない。性別にみると男性で「どちらかといえば妻が取る方がよい」が約4ポイント増加している。

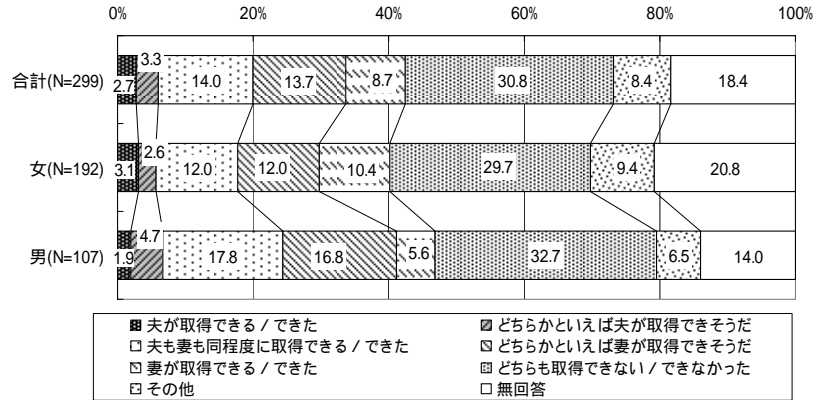
イ．育児・介護休業を取得できるか

育児休業



全体では「どちらも取得できない/できなかった」が 28.8%で最も多く、次いで「妻が取得できる/できた」が 24.7%、「どちらかといえば妻が取得できそうだ」が 10.7%などとなっている。性別にみると「妻が取得できる/できた」は女性が男性より約 9 ポイント高い。「夫も妻も同程度に取得できる/できた」は男性が女性より 7 ポイント高い。

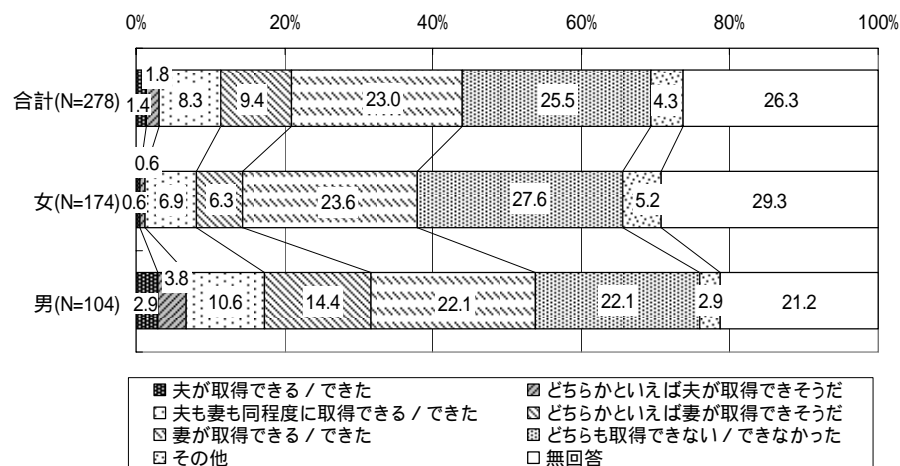
介護休業



全体では「どちらも取得できない/できなかった」が 30.8%で最も多く、次いで「夫も妻も同程度に取得できる/できた」が 14.0%、「どちらかといえば妻が取得できそうだ」が 13.7%などとなっている。性別にみると「夫も妻も同程度に取得できる/できた」は男性が女性より約 6 ポイント高い。「どちらかといえば妻が取得できそうだ」は男性が女性より 5 ポイント高い。「妻が取得できる/できた」は女性が男性より 5 ポイント高い。

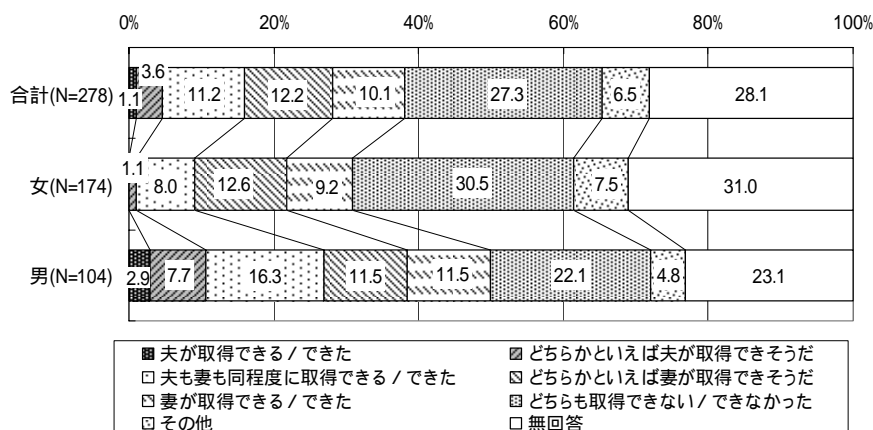
< 前回調査 >

育児休業



前回調査と比較すると全体では大差はない。性別にみると「妻が取得できる/できた」は女性で約 5 ポイント増加した。「どちらも取得できない/できなかった」は男性で 10 ポイント増加した。

介護休業

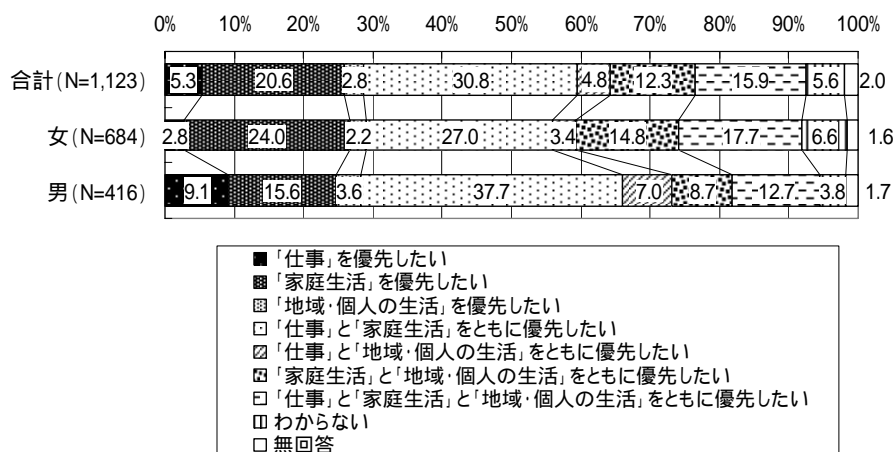


前回調査と比較すると全体では大差はない。性別にみると「どちらも取得できない/できなかった」は男性が約 11 ポイント増加、「妻が取得できる/できた」は男性が約 6 ポイント減少、「どちらかといえば妻が取得できそうだ」は男性が約 5 ポイント増加した。

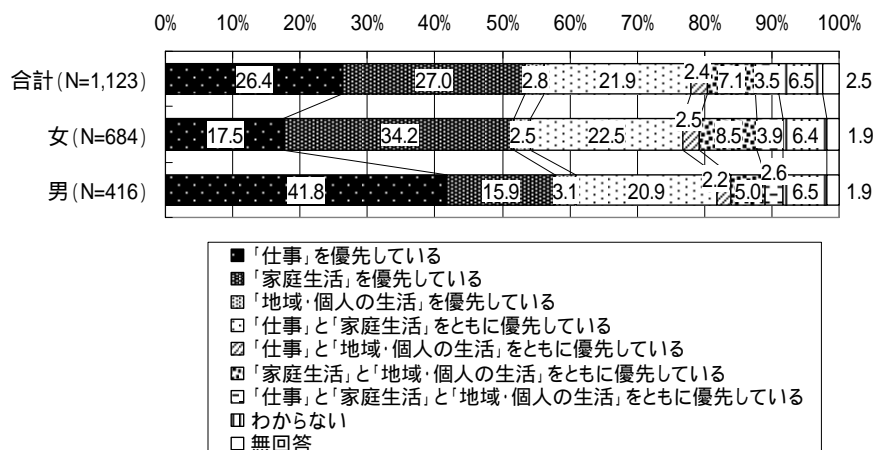
(7) 仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先度

問 1 1 あなたの希望と現実(現状)について、一番近い選択肢の番号に 1 つ をつけてください。

< 希望 >



< 現実(現状) >



希望は、全体では『「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい』が30.8%で最も多く、次いで『「家庭生活」を優先したい』が20.6%、『「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先したい』が15.9%などとなっている。性別にみると『「仕事」と「家庭生活」をともに優先したい』は男性が女性より約11ポイント高い。『「家庭生活」を優先したい』は女性が男性より約8ポイント高い。

現実(現状)は、全体では『「家庭生活」を優先している』が27.0%で最も多く、次いで『「仕事」を優先している』が26.4%、『「仕事」と「家庭生活」をともに優先している』が21.9%などとなっている。性別にみると『「家庭生活」を優先している』では女性が男性より18ポイント高い。『「仕事」を優先している』では男性が女性より24ポイント高い。

< 国との比較 >

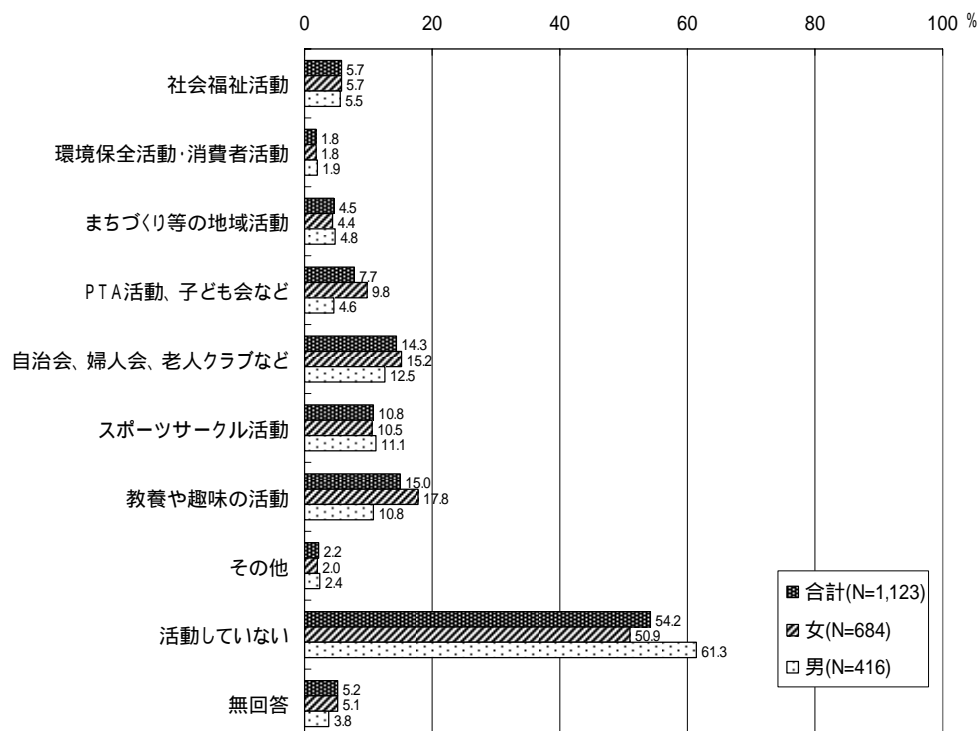
内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成21年10月)と比較すると、希望の全体では項目の順位の違いは無いが、『「家庭生活」を優先したい』では、本市が約8ポイント低くなっている。

現実(現状)の全体では、項目の順位に違いは無い。女性では、『「家庭生活」を優先している』が、本市が国より10ポイント低くなっている。

(8) 地域活動・グループ活動

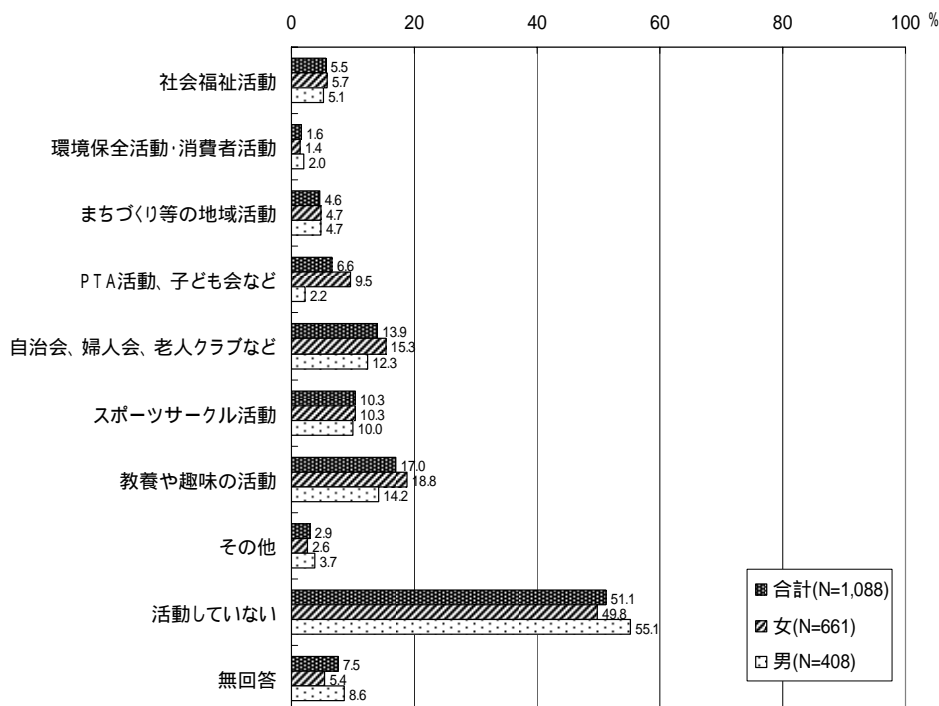
問9 家事や仕事以外で、現在地域活動やグループ活動をされていますか。また、今後新たにしてみたいと思う地域活動やグループ活動はありますか。あてはまる選択肢の番号にすべてをつけてください。

現在している活動



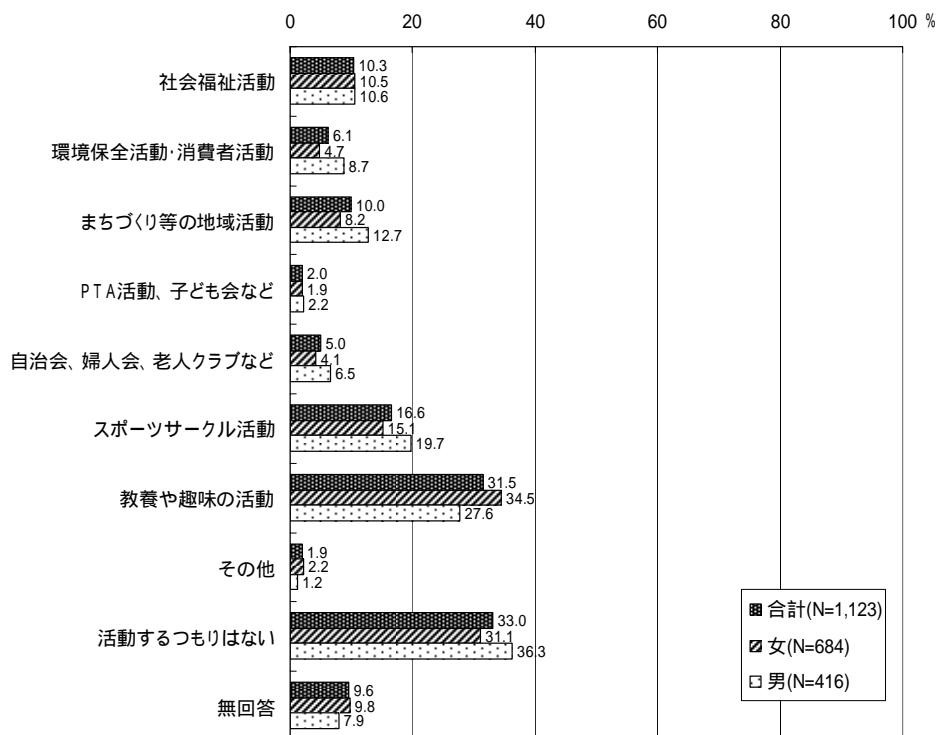
全体では「活動していない」が54.2%で最も多い。活動内容は「教養や趣味の活動」が15.0%、「自治会、婦人会、老人クラブなど」が14.3%、「スポーツサークル活動」が10.8%などとなっている。性別にみると「活動していない」は男性が女性より約10ポイント高い。また「教養や趣味の活動」は女性が男性より7ポイント高い。

< 前回調査 >



前回調査と比較すると大差はない。性別にみると「活動していない」は男性で6ポイント増加した。

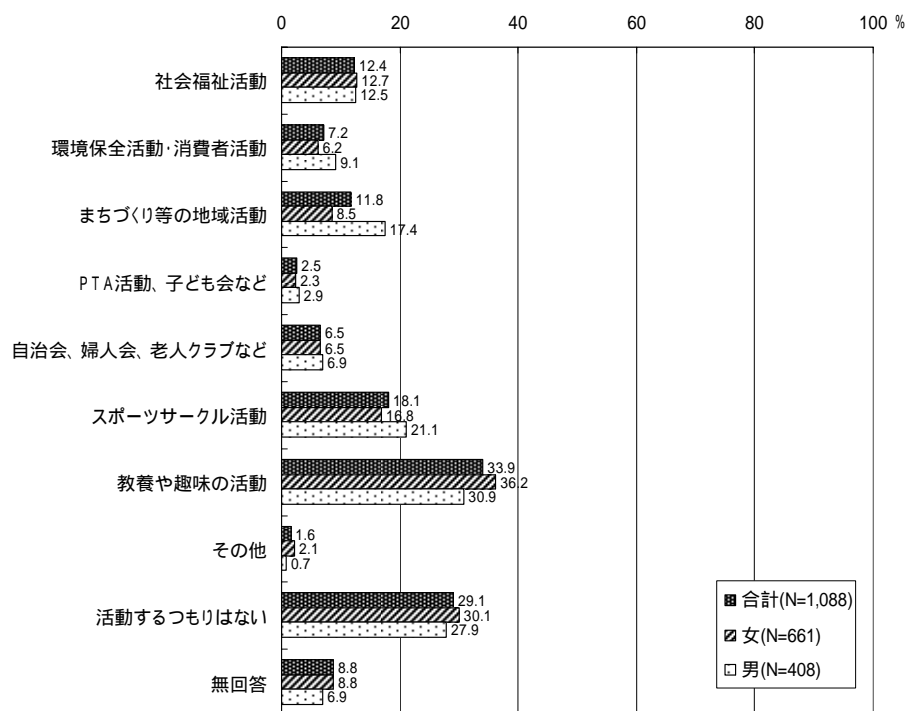
今後新たにしてみたい活動



全体では「活動するつもりはない」が33.0%で最も多い。してみたい活動内容は「教養や趣味の活動」が31.5%、「スポーツサークル活動」が16.6%、「社会福祉活動」が10.3%などとなっている。

性別にみると「教養や趣味の活動」は女性が男性より7ポイント高い。「スポーツサークル活動」「まちづくり等の地域活動」は男性が女性より約5ポイント高い。

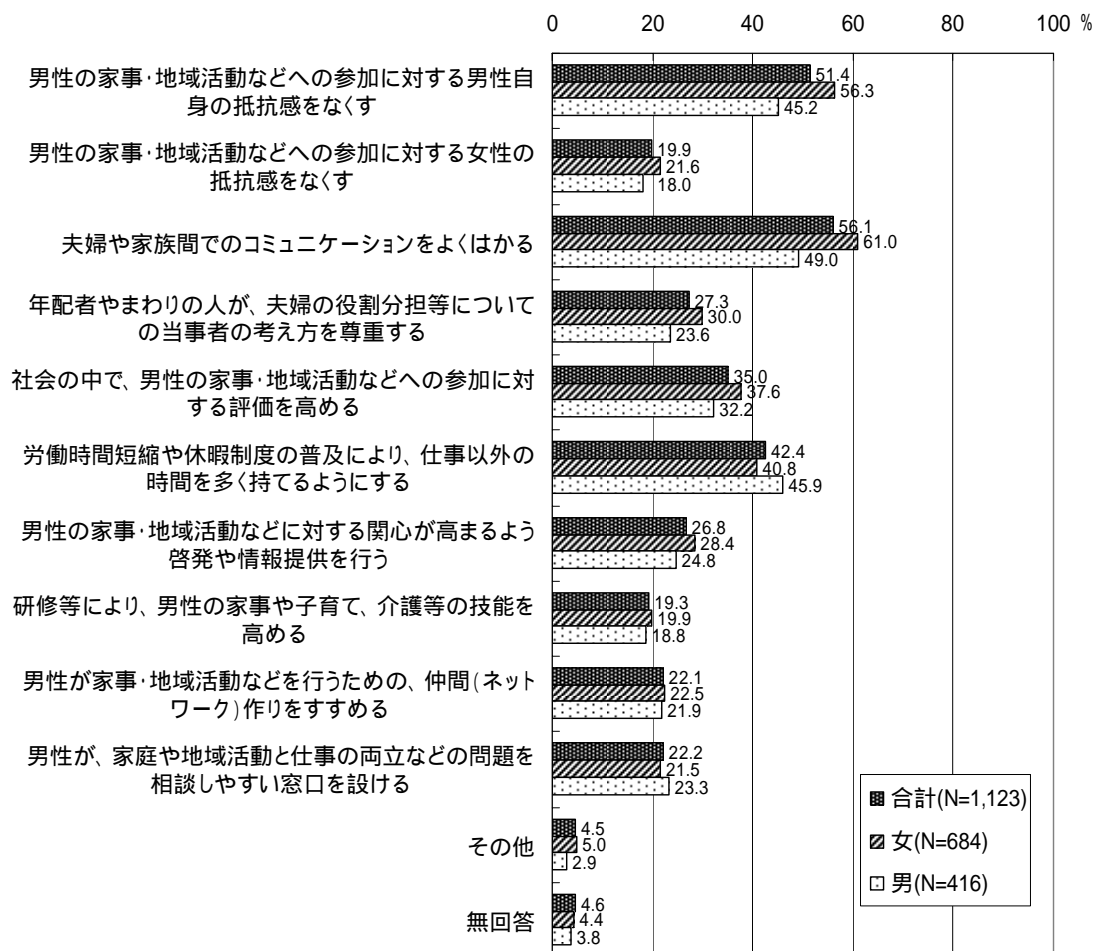
< 前回調査 >



前回調査と比較すると「活動するつもりはない」は約4ポイント増加した。性別では「活動するつもりはない」は男性が約8ポイント増加した。「まちづくり等の地域活動」は男性で5ポイント減少した。

(9) 男性の参加のために必要なこと

問12 今後、男性が女性とともに家事、子育て、介護、地域活動に積極的に参加していくためには、どのようなことが必要だと思いますか。あてはまる選択肢の番号にすべてをつけてください。



全体では「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかる」が 56.1%で最も多く、次いで「男性の家事・地域活動などへの参加に対する男性自身の抵抗感をなくす」が 51.4%、「労働時間短縮や休暇制度の普及により、仕事以外の時間を多く持てるようにする」が 42.4% などとなっている。

性別にみると「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかる」は女性が男性よりも 12 ポイント高い。「男性の家事・地域活動などへの参加に対する男性自身の抵抗感をなくす」は女性が男性よりも約 11 ポイント高い。

自由意見

(1) 記入状況

回収数 1,123 票のうち、自由意見の記入があったものは 190 票（16.9%）であった。女性は、回収率 684 票のうち 118 票（17.3%）、男性は回収率 416 票のうち 70 票（16.8%）に記入があった。

自由意見を内容別にみると、「施策に対する意見・期待」が 29 件、「男女の役割」が 41 件となっている。

性別年代別自由意見記入状況

		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	計
女性	回収数	72	118	103	101	164	126	0	684
	記入数	5	28	20	17	26	22	0	118
	記入率	6.9%	23.7%	19.4%	16.8%	15.9%	17.5%	0.0%	17.3%
男性	回収数	29	61	67	67	104	88	0	416
	記入数	1	16	11	12	15	15	0	70
	記入率	3.4%	26.2%	16.4%	17.9%	14.4%	17.0%	0.0%	16.8%
不明	回収数	0	0	0	0	1	4	18	23
	記入数	0	0	0	0	0	0	2	2
	記入率	-	-	-	-	-	-	11.1%	8.7%
計	回収数	101	179	170	168	269	218	18	1123
	記入数	6	44	31	29	41	37	2	190
	記入率	5.9%	24.6%	18.2%	17.3%	15.2%	17.0%	11.1%	16.9%

内容別自由意見記入表

		記入数	記入比率
男女共同参画	施策に対する意見・期待	29	15.3%
	男女の役割	41	21.6%
	労働・職場	19	10.0%
	子育て・教育	22	11.6%
	家庭生活	7	3.7%
	施策の周知	15	7.9%
	地域活動	6	3.2%
調査に対する意見		37	19.5%
その他		14	7.4%
計		190	100.0%

(2) 代表的な意見

1. 施策に対する意見・期待

家事、育児の男女共同参画に対する理解は、以前に比べて深まっていると思います。ただし、育児休業を実際に取得できるのは、正社員（フルタイム）に限られるのが現実ではないかと感じます。（女・30代）

本当はこのようなことが問題になる以前に、男女が平等というのが当たり前という世の中が一番いいと思います。例えば女性センターに対し、男性センターがある訳ではないので女性という事をあえて取り上げる必要がなくなる事が理想です。（女・30代）

男女共同参画の言葉すら分らない人が多いと感じます。もっと推進策を皆で考えていけたらと思います。（女・50代）

本当の意味で「男女共同参画」を実現するには、「女性専用」とか「女性優先」ということが過度にならないよう配慮する必要があると思う。（男・40代）

2. 男女の役割

女性はもっと積極的に各種分野で活動すべき。「女性だから はしなくてもよい」という考えは、あらためるべき。男性は「女性の出る幕ではない」という考えをあらためるべき。（男・60代）

男女差別は困るけれど、ある程度の男女の区別はあって良いと思います。（例えば、子供を産むのは女性しかできない事なので産前、産後の休みをしっかりと取れるようになど）（女・40代）

男女というより、一人一人の個人を大切にすることが大切なのではないでしょうか。（女・50代）

3. 労働・職場

就労時間と男女の結婚後の職場の扱いの違いについて、根本的に意識を変えるだけでなく、多くの企業で実践されなければ難しいと感じました。（男・30代）

独身の頃はフルタイムで働いていましたが、「女の子は腰かけ、お茶くみ」と軽い扱いの時代でした。自分たちも何となくそのような感覚でいたように思います。今、就職難ということもあり、女性自身がしっかり意識を持って自立していかないと、と改めて思いました。（女・50代）

男女共に働き、共に子育てし、家庭を築くのが理想とは思いますが、現実には、夫の側は毎晩遅くまで残業でくたくた。妻はひとりで育児を抱え込んでストレスを...、と私の時代の子育てと息子の家庭を見ていて変わっていないと思います。男性の働き方が変わらないと無理だと思っています。（女・60代）

4. 子育て・教育

私は、自分が女性と言うだけで大学進学を許されず涙しました。それで自分が子供を持ったら男女の差をつけないと心に決め、子育てしました（女・50代）

もっと男女が平等でというより社会全体が今の女性に（母に）任せっきりの現状の子育て家事等の負担を考えていかないと少子化は永遠に無くならないと思う。（性・年不明）

5. 家庭生活

男女平等...世間的にはすごいスピードで確立されつつあると思います。しかし、家庭の中では決してそうではないのが現状です。（女・40代）

6. 施策の周知

私自身、詳しいことがわからないので、もっと広報すべきだと思います。（女・30代）

今回“男女共同参画”というものを初めて知りました。どんな活動をされているのか具体的にはよくわかりませんが、今後気を付けて情報を得ようと思っています。(女・50代)

7．地域活動

夫は地域の活動にもとても参加し貢献しています。ただあまりにも仕事が忙しく労働時間も長いので、体をこわさないか心配です。(女・50代)

8．アンケート調査に対する意見

男女共同の意味がわかりません。アンケート内容、もっとわかりやすくしたらどうですか？(男・30代)